

問題をもつ子の指導について

関根 廣志(中央区教育支援センター)

はじめに	5
I 生徒指導の3つの観点 (文科省「生徒指導提要」による)	5
1 成長を促す個別指導	5
2 予防的な個別指導	6
3 課題解決的な個別指導	6
II 問題をもつ子についての基本的な理解	6
1 「問題児」ではなく「問題を持っている子」である	7
2 情緒や行動の個人差は、ときに学力以上のものがある	7
3 生徒を理解することは簡単ではないが、その姿勢こそが大切	7
4 児童生徒理解とは子どもの何を理解すればよいのか	8
5 生徒指導の問題は、同時に学習指導の問題と認識しない限りは解決しない	8
6 授業での居場所づくりを徹底して行いたい	9
II 生徒指導の面から目指したい子どもの姿	9
1 子どもに「自尊心」をもたせたい	9
2 「かけがえのない自分」と思う感情だけでは不十分な自尊心となる	9
3 子ども心の中心に「優れたブレーキ」を積んでやりたい	10
4 「ならぬものはならぬものです」という心を自分自身の中に植え付ける	10
5 「やらされている」と「それがいいと思ってやっている」のでは大違い	11
6 「そうしている自分が誇らしい」と思えるようになるまで	11
7 ルールを守るだけでなく、望ましいマナーを身に付けた子どもに	11
III 問題をもつ子をどう指導するか	12
1 問題をもつ子を指導するにあたって	12
(1) 問題行動の原因には多様な要素がある	12
(2) 成育歴の中での家庭の大事な機能が欠如すると	12
(3) 学校や教師ができることに目を向けるしかない	13

(4)	「排除の論理」で子どもが立ち直ったという話は聞いたことがない	13
(5)	「自分にも至らないところが」と考えられる教師でありたい	14
(6)	厳しい指導をはき違えてはいけない	15
(7)	「いい子になったら」ではなく「いい子になるまで」関わるのが生徒指導	15
(8)	生徒指導では「失敗」という言葉はあってはならない	16
(9)	「この先生についていけば」という安心感・信頼感をもたせることが大切	16
(10)	担任が一人で問題を抱え込まず積極的に協力を仰ぐ	16
2	問題の発見や対応は、早ければ早いほどよい	17
(1)	子どもの問題は“ある日突然”はない、できる限り事前にキャッチしたい	17
(2)	教師の「気になる」という感覚はとても大事	17
(3)	前兆を確実にキャッチし、そしてそれをキャッチしたならば	17
(4)	子どものこんな状況には注意したい	18
(5)	社会では許されない行為は学校でも許されない	18
3	問題をもつ子がグループ化している時には	19
(1)	共通のストレスで結び付いている	19
(2)	良くない行為のハードルはすこぶる低くなっている	19
(3)	ボスの考えが集団の空気を支配する	19
(4)	一人だけグループを抜けさせようと思っても難しい	20
(5)	グループが問題ではなく、そこにしか居場所がないことが大きな問題	20
(6)	教師も共にという姿勢がないと改善に向かわない	20
4	立ち直りのための支援	21
(1)	指導にあたっての心構え	21
①	見て見ぬふり、無関心だけはあってはならない	21
②	問題の解決はその子どもの生活全体の見直しから	21
③	“みんなの迷惑になっている”という指導では子どもは反発するだけ	22
④	その子の少しの改善・進歩でも認め、共に歩む姿勢が何より重要	22
⑤	指導が難しい子どもほど「どう気付かせるか」しかない	23
⑥	学級の子どもたちに頼る前に教師があきらめない姿勢を示し、相談のパイプも太く	23
(2)	状況の正確な把握と児童生徒理解	24
①	彼を取り巻く切ない状況は理解したい	24
②	問題を持つ子のプライドは高く、被害者意識も強い、勉強の面倒をみたい	24
③	周りに彼らを支持しているグループがいることもある	25
④	彼らにいじめられている子がいることも多い	25

(3) 具体的な直接支援	25
① 彼らとの日ごろのコミュニケーションの見直し	25
② 彼らを褒めたり、認めたりする機会を積極的につくっていく	26
③ 問題を起こした子どもを集団でまとめて指導することはむしろ害になる	27
④ 彼らの仲間内のルールや“オキテ”をわかった上で指導にあたる	27
⑤ 彼らはわがままかもしれないが、本音は「みんなの仲間に入りたい」	27
⑥ 少しでも将来への展望がもてるように	28
(4) 反省するとはどういうことか	28
① 反省することの中身は何なのか	28
② 安易な謝罪は「百害あって一利無し」	28
5 学級集団の一員となるために	29
(1) 立ち直りには、仲間からの「一緒にやろう」のメッセージが何より有効	29
(2) 問題をもつ子どもを仲間に入れるために教師のやるべきことは	29
(3) 学級の一員としての仕事はどんなことをしてもやらせたい	30
(4) 他人の話を「聞くこと」がもっとも重要	30
(5) 友だちづくりへのアドバイスのポイント	31
(6) 周囲の子どもには、「心の痛み」を醸成し、共に成長させたい	31
6 ふだんから教師に心がけておいてほしいこと	32
(1) 中学1年生でも3年生の最高のツッパリ生徒だと思って注意をする	32
(2) 教務室の雰囲気子どもを育てる、そこでは子どもを叱ってはならない	32
(3) 本人がピンチの時に責めてはならない	33
(4) 教師による教育相談は、相談後の「今はどうだ」の一言こそが大事	34
(5) ある時は「教師と子どもは一心同体」、それがすごい教育力になる	33
IV 保護者との連携をどう図るか	34
1 保護者との連携のための基本的な心構え	34
(1) 保護者は尊重すべき生徒指導の最大のパートナー	34
(2) その子のために、教師の“良心をかけて”保護者に向かいたい	34
(3) 保護者対応のスタンダード	35
2 保護者との連携とは、何をどのように連携すればよいのか	35
(1) スムーズな連携のための基本	35
(2) 保護者との共通理解は思いの外難しい	36

(3)	「他の子が迷惑している」、「学校では困っている」は絶対に口に出してはならない -----	36
(4)	問題を大きくしてしまうのは、保護者を「情報飢餓状態」におくことである --	37
3	保護者との面談にあたって -----	38
(1)	こちらが聞きたいことではなく、保護者の言いたいことに耳を傾ける -----	38
(2)	保護者に他の子や他の親の話をする時には、当事者が同席していると思って --	39
(3)	たとえクレームをつけにきた保護者も帰る時には笑顔で帰ってもらえるよう --	39
4	保護者と共通の認識をもちたいこと -----	39
(1)	“たとえそうでなくとも”、親は子どもの「最後の砦」であってほしい -----	39
(2)	親であれば子どもを信じたい、しかし子どもの何を信じてやればよいのか ----	40
(3)	子どもの気持ちを汲むということは -----	41
(4)	大人が子どものモデルや目標になりたい -----	41
	おわりに -----	42
	主な参考文献 -----	42

問題をもつ子の指導について

関根 廣志(中央区教育支援センター)

はじめに

およそどの学校においても、生徒指導上の問題がないということはないであろう。もしないというならば、今はないか、あっても見えていないことが考えられる。学校においては、子どもの「健全な人格の形成」においても「学力の形成」においても、その基盤としての生徒指導が重要であることは論を待たない。

さて、文科省の『生徒指導提要』(平 22・3 刊)においては、「生徒指導では、学校教育のあらゆる場面で、児童生徒が社会で自立するために必要な力を身につけるために、個別に配慮した指導・援助をする必要があります。個別指導を効果的に進めるために、教員は日常の学校生活を通して、児童生徒との信頼関係をつくるよう努めることが大切です」と個別指導の重要性が述べられている。そしてその個別指導を三つに分けて考えている。それが、「成長を促す個別指導」、「予防的な個別指導」、「課題解決的な個別指導」である。

ところで、「成長を促す個別指導」、「予防的な個別指導」については、その理念や方法は、学級集団づくりや特別活動の指導と大きく重なる。むしろこれらの領域の指導に力を入れ、より充実させることが、同時に目指す生徒指導の成果も得られると考えている。現場においては、これを超える方法論は今のところ見当たらない。

そこで本レポートでは、多くの学校で対応に苦慮している、「課題解決的な個別指導」、いわば「問題をもつ子」の指導を中心に述べてみることにしたい。

もちろん「問題をもつ子」と言っても、その問題の現れ方は、多種多様である。「いじめ」や「不登校」はその典型ではあるが、この二つの問題について私自身は、これまで過去にかなり詳しくレポート済みである。そこでここでは、これまでまとまったレポートの機会がなかった「集団からの逸脱行動」が見られる、通常どの教員もイメージする「問題をもつ子」の指導について述べてみることにした。

生徒指導は、ある特定の理論や方法通りにやれば必ずうまくいくというものではないことは、どの教師も承知している。だからといって理論を軽視してはならないが、多分に「経験から学ぶ、実践から学ぶ」という要素が大きい。したがって本レポートでも、背景となる理論は、高旗正人氏の「自主協同学習」にあるが、内容は経験を通して得たものが中心であることを申し上げておきたい。どのページからでも、読んでいただければ幸いである。

I 生徒指導の3つの観点 (文科省「生徒指導提要」による)

1 成長を促す個別指導

すべての児童生徒を対象に、個性を伸ばすことや、自分自身の成長に対する意欲を高めることをねらいとする。例えば、個々の児童生徒に応じた情報提供や各種の基礎的な技能、

学習技術についての習得や熟練の機会を与えたり、将来の生き方などについて話をするなどの働きかけが考えられる。

2 予防的な個別指導

一部の児童生徒を対象に、深刻な問題に発展しないように、初期段階で諸課題を解決することをねらいとする。例えば、ある時期に遅刻・欠席が増加する傾向が見られたり、身だしなみなどにも変化が見られる児童生徒に対して、早期に面接などをする働きかけが考えられる。またどの児童生徒も、学習、進路、対人関係、健康、経済的困難などの点で、多少なりとも悩みをもっている。このような悩みが原因で学校生活に支障をきたす可能性も少なくない。早期の解決が大事である。これからの学校教育において予防的な視点は一層その必要性を増してきている。

3 課題解決的な個別指導

学校生活に適応できない児童生徒の増加は、社会問題の一つと言える。特に、深刻な問題行動や悩みを抱え、なおかつその悩みに対するストレスに適切に対処できないような特別に支援を必要とする児童生徒に対しては、学校はその課題解決に焦点を当てた個別指導及び支援をする必要がある。もちろんその課題やストレスの表し方は個性的で、外から容易に見えるものもあれば、簡単には見えないものもある。

ところで、一般に特に彼らに欠けている資質は、自らの欲求や欲望を自分で抑え、正しく判断し進んで行動する「自律性」と「社会性」の中でも社会規範意識や他と協調する力がとりわけ欠けていると指摘されている。このことから、新潟市教委が「自律性」と「社会性」の育成に着目した意味がある。

しかしながら、課題解決的な個別指導は、担任一人で解決に導くには困難な場合が多くある。問題を一人で抱え込んだために悪化するケースも少なくない。管理職などと相談しながら、専門家のアドバイスを得るなど複数で対応することが大事である。

児童生徒が持つ課題の背景には、児童生徒の個人の性格や社会性などの個人的な問題、児童虐待・家庭内暴力・家庭内不和・経済的困難など家庭の問題、自閉症などの発達障がい、友人間の人間関係をめぐるトラブル、教師の指導への反発などが多くみられる。

学校としてはこのような背景を十分理解した上で、関係者によるチームで対応することが求められ、時には外部の専門機関や専門家との連携も必要である。

II 問題をもつ子についての基本的な理解

生徒指導の問題の解決にあたっては、その問題の事実関係の把握や解決方法の策定にエネルギーを費やすことも大事だが、子どもは問題行動を通し周囲の状況に対して、「異議申し立て」をしている。その子どもの「心や動機」に目をやり、それを理解しようとしなければ問題の本質は見えず、真の解決には至らない。彼の真実の気持ちはどこにあるのか、本当に欲しいものは何か、本当にわかってもらいたいことは何かにまず寄り添いたい。

ここでは、問題をもつ子の立ち直りに向け基本としたいことを挙げてみたい。

1 「問題児」ではなく「問題を持っている子」である

「問題児」というとらえ方は、いわば「教師にとって」あるいは「大人にとって」というニュアンスが色濃く出て、「子どもの立場に立って」や「子どもの成長のために」という生徒指導の最も根幹となる部分が欠落している。

またそのとらえ方は、子どもを、その問題となる行為や考え方ではなく、トータルとしての人格をも否定することになりかねない。それはもはや「人権問題」であり、教師としては、絶対にあってはならない考え方である。あくまでも指導の対象にすべき事柄を見誤ってはならない。彼の健全な成長に向け、今は何が問題なのかを明確にし、指導・支援を続けていく必要がある。

生徒指導は、子どもを教師に従わせるものではなく、子どもの健全な成長を促すものでなければならない。どちらの立場に立つかによって子どもの見方や手の差し伸べ方が180度違ってくることは言うまでもない。

教師の都合のいいように指導し、子どもが変容したと思っても、子ども自身がその指導に納得しているとは限らなく、単なる処世術を身に付けたに過ぎないかもしれない。教師の大事な仕事は、子どもが自分自身の手で問題を乗り越える過程をサポートすることにより、問題を解決する力をつけてやることである。

2 情緒や行動の個人差は、ときに学力以上のものがある

教師は子どもの生活習慣や善悪の判断等の問題に対しては、この年齢の子どもはこの程度できて当然、この学年の発達段階であればこのレベルまでいっているはずだ、という思い込みやまたは他との比較で指導しがちになる。学力で認めている個人差を生徒指導の面ではなかなか認めないのである。指導が有効に機能しない大きな要因となっている。

心や行動の発達や成長にも個人差があり、またそれは環境の影響も大きいだけに、時には学力以上のものがあることを認識した上で、子どもの指導を行わなければならない。

したがって、彼の判断力や行動傾向が発達的にみてどのレベルにあるかを見極め、それに合ったところから指導をスタートさせることが必要である。またそれは必ずしも学力とは比例や連動はしないという理解も忘れてはならない。一律ではなく、個に応じた指導、まさに個別の指導がどうしても必要になる所以である。

そして実際の指導にあたっては、その評価基準を集団の中のできる子や、あるべき姿、いわば外に基準を置くのではなく、“これまでのその子”という、個の中に基準を置くことで、その「伸びしろ」をみてやりたい。そのことで、指導や評価のし方が変わり、結果的にはその子の成長や変容が早く効果的に促されるはずである。

3 生徒を理解することは簡単ではないが、その姿勢こそが大切

生徒指導においては、「生徒指導は生徒理解に始まり生徒理解に終わる」という言葉もあるくらい、児童生徒理解は重要である。「子どもの変化を見取り、子どもを理解し、そして適切な指導・援助を加え、その結果をまた見取り、より深く理解していく」このことの繰り返しである。昨今は、このサイクルを、より一人一人に即し、強化していくことが求められている。

しかしながら、その取組の中で、子どもを安易に理解できた、解釈できたと思うことは

厳に慎まなければならない。子どもを理解することは、そう簡単ではないはずである。子どもは日によっても、相手によっても違った表情を見せる。どれが本当の姿かということはない。「どれもその子」なのである。要は、努めて子どもに寄り添い、理解しようとする姿勢があるかどうかの問題なのである。

また、子どもが送ってくるサインも子どもを理解するための大きな手がかりとなる。しかし、子どものサインは読んでやらなければ意味がない。それには、ふだんからサインを発していない時の子どもの表情や目の動き、話し方を知っていなければならない。ふだんとの違いがわかってはじめて、異常信号をしっかりキャッチでき、見取りができる。

受け手が優秀ならば、子どもはどんどんとサインを送ってくれる。その子どもの日頃の様子を知っていればこそ、小さな変化も見え、ボディメッセージも見逃すことはない。

4 児童生徒理解とは子どもの何を理解すればよいのか

子どもにとっては、自分のことを先生に「わかってもらっているかどうか」は、極めて重要である。では、教師は子どもの何を理解すればよいのであろうか。

子どもはよく教師に対して「わかっていない」ということを言う。教師がいくらその子のことを詳しく知っていても、自分のよい所を認めてくれない人間は「わかってない」ということを言い続ける。児童生徒理解は、子どもの良いところ、子どもが自分で誇りに思っていることを認めてやる、探してでもそれを認めてやることに尽きるのである。

教師が、子ども一人一人の良さを懸命にわかろうとする過程や、彼の良さを新たに生み出してやろうと努力する過程は、紛れもなく子どもとの信頼関係づくりの過程であり、それが生徒指導そのものであるとあってよい。

5 生徒指導の問題は、同時に学習指導の問題と認識しない限りは解決しない。

授業中に立ち歩いたり授業妨害をしたり、あるいは授業エスケープをする子どもがいることがある。これらの子どもに対しては、特に中学校の教師の間では、「授業以前の問題で基本的なしつけができていない、生徒指導の問題である」と結論づけることがある。この考え方をしている限り決して問題は解決しない。

問題なのは教師のとっている、勉強のできる者が常に高い評価を受け、できない者は肩身の狭い思いをさせられたり、ひどい時にはみんなの前で恥をかかされたりする指導のやり方である。また、答えを間違ったり、教師の指示するような学習態度でない者が叱責を受けることがある。そこでは間違えることは許されず、絶えず緊張感の中で自分を守りながら、時にはわかったフリをしながら授業を受けることになる。そんな状況では、勉強の苦手な子どもにとって授業時間は、“我慢の時間”以外の何者でもなくなる。

このような授業を行って行けば、授業に参加できない、授業に不満をもっている子どもは別の形での自己主張を始めることになる。それが問題行動として現れるのである。彼らには、生徒指導面と学習指導面の両方からのアプローチがどうしても必要なのである。

それを教師が自分の授業のあり方を見直すことなく、力で押さえようとしたり、教師のもつ評価権を振りかざした時には、教師への反発は決定的となり、そこから“子どもの荒れ”や“学校の荒れ”が始まった例はいくらでもある。教師のこのことの自覚なしに、学校から生徒指導上の問題がなくなることは考えられない。

6 授業での居場所づくりを徹底して行いたい

先に述べたことをもう少し検討してみたい。これまで問題をもつ子どもは、よく学級での居場所がない言われてきた。しかしもう少し子どもの心情に寄り添ってみると、本音は、授業での居場所がないことの方が本当である。どんな子どもでも“勉強ができるようになりたい”、“授業に参加したい”と切に願っている。

ところが彼らは、教師が意識するしないに関わらず、授業で競争的な一斉指導が進められていく中で、次第に授業についていけなくなり、勉強をあきらめ、心が傷つき、居場所を追われているのである。

特別な補充指導や個別学習はその子どもたちにとっては決して本意ではない。彼らは授業の中で分かってほしいのである。なんとしても彼らを取り込んだ学習集団づくり、授業づくり、時にはむしろ彼らが主役になるような授業展開が必要なのである。

最低限、このことへの理解、彼らの授業参加への配慮がなければ、学校では「いつ問題が起きてもおかしくない状況」、ある意味の「危機的状況」が続くのである。

そして最も問題なのは、彼らには自分が授業に参加できないでいること、勉強がわからないことを心から心配してくれる人が周囲にいないことである。教師は、まずその心情をわかってやることから出発していくことが重要である。

Ⅱ 生徒指導の面から目指したい子どもの姿

1 子どもに「自尊心」をもたせたい

生徒指導の一つの大きな目標として、子どもに「自尊感情」ないし「自尊心」をもたせるということがある。時にそれは、「自己肯定感」、「自己有用感」とも呼ばれる。これは、いわゆるプライドや傲慢、自惚れ、驕りとは異なり、自己の存在や在りようを尊重（大切に思う）する感情のことである。

特に、主体性や自信の形成においては、自尊心のない者は、自分を信用することができないため、自分自身の能力にすら懐疑的になってしまい、何も為すことができない。自尊心をもっている者は、自分自身を価値あるものとして認識し、意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己にも他者にも受容的な態度がとれることから、精神的な健康や適応の基盤をなす。

ところで子どもは、失敗や挫折からはこのような感情は生まれにくい。「うまくいった」、「成功した」、「みんなのためになった」、「頼りにされている」、「自信がついた」こんな経験をぜひ学校生活のあらゆる場面で経験をさせてやりたい。キーワードは「手柄は子どもに」である。間違っても教師が目立とうとしてはならない。子どもに手柄を取らせるには、教師の並々ならぬ事前の指導や支えが必要なはずである。そのプロセスこそが、重要な生徒指導であり、子どもとの人間関係づくりの要諦である。

2 「かけがえのない自分」と思う感情だけでは不十分な自尊心となる

自尊感情というと、つい「かけがえのない自分」、「一人しかいない自分」といった自分自身に注目が集まり強調しがちになるが、そうではない。「かけがえのない他者」、「みんな

など一緒にいる自分」といった感情を同時にバランスよく育てていくことが、社会で他と協同しながら生活していくための、正しい自尊感情の形成につながっていく。

その感情は、例えば学校の中では具体的には「今の自分、こういうことのできる自分が誇らしい」と思うと同時に、「友だちを誇りに思う」、「先生を誇りに思う」、「学級を誇りに思う」、「学年を誇りに思う」、「学校を誇りに思う」こんな感情ではないだろうか。ぜひ育てていきたい。

それと同じことが、「家族を誇りに思う」など家庭や地域社会、さらには国家に対する感情形成にも言えることである。

3 子どもの心の中に「優れたブレーキ」を積んでやりたい

これからの社会はますます複雑化し、情報があふれ、誘惑も多く、子どもも易きに流れがちになる。子どもが将来豊かで自立した社会生活を送れるかどうかは、「自律の心」をいかに培っているかが大きな問題となる。

「優れたエンジンには優れたブレーキがついていること」は、自動車の常識といわれている。人間にも、高い意欲をもち何事にも一生懸命取り組む優れたエンジンと、自分の意思や行動を適切な判断力をもって自分で制御できる優れたブレーキが必要である。そのバランスがハイレベルでとられている子どもを一人でも多く育てたい。

生徒指導の大きな目的の一つは、子どもの中に優れたブレーキを積んでやることだと言ってもよい。それが備わっている子どもは、決まって自分で自分の行動を律することができ、明らかに間違った行為やその場に相応しくない行動はとらない。そんな子どもは、とてもすがすがしく、人としての美しさも感ずる。

「自己の内面を耕し、自律の心をもって行動できること」は「自己教育力」や「自己指導力」の育成と大きく重なり、生徒指導では大切な目的である。

4 「ならぬものはならぬものです」という心を自分自身の中に植え付ける

社会規範意識が薄くなっているのは、現代の子ども全体に共通する傾向であろう。規範意識や倫理観は望ましい集団生活を行っていくには、どうしても身に付けておかなければならない資質である。

もちろんその育成過程においては、他律的な教育も必要である。時には厳しく叱ることもあるであろう。しかし、それはあくまでも自律を見据えた、自律へ向かう筋道の上での他律でなければならない。

会津藩の藩校「日新館」には、子弟の心構えとして童子訓「什の掟」というものがあった。会津を舞台にしたテレビドラマの影響もあり、近年再び注目されてきている。

その教えの中には、「三、虚言を言うことはなりませぬ。四、卑怯な振る舞いをしてはなりませぬ。五、弱い者をいじめてはなりませぬ。」などという現代こそ強調しなければならない教えが含まれている。そしてその最後には、「ならぬものはならぬ」という戒めがある。

これは一般には、「ダメなものはダメ」と他律的に捉えられがちであるが、本来は逆である。これはあくまでも自分の心に向かっての戒めであり、極めて自律的なものであり、厳しい自律心を内に形成しようとするものである。他律であれば、単に強い者に従ってい

るだけで、決してその心は本物にはならないのである。

子どもにも、何かに甘えたり、ごまかしたりすることなく、「ならぬものはならぬ」という価値観を子どもの心の中にぜひ形成させてやりたい。この自律心の育成に向かうことなくして、子どもの指導をしたとは到底言えない。

それには、会津藩の「ならぬものはならぬものです」の本当の意味(自分に厳しい気持ちを自分自身の心の中に植え付けていくこと)を実践・指導していくことである。

社会規範を育てる教育の目指すところは、誰かに言われてやるのではなく、誰も見ていなくとも、正しいことを“自分の心の命令”でいつでもできる力をつけていくことである。

5 「やらされている」と「それがいいと思ってやっている」のでは大違い

「挨拶がよい」、「服装や髪型がよい」、「整列がよい」、「私語がない」、「掃除を一生懸命やる」、例えばこのようなことは、どの学校も目指していることであり、ある意味ではこれらは外からみただけでもすぐにわかるので、学校や子どもの善し悪しを判断するバロメータになっている。

しかし、一見同じように見えても、何か外的な力が働き「やらされている」のか、自分たちが「それがいい、そうすることが当たり前」と思ってやっているのかでは価値がまったく違う。やらされているとすれば、環境が変わればすぐに元に戻ってしまい、本人の身には付かないし、それは教育ではない。

中には「それは理屈抜きのしつけだ」という教師もいる。しかし、その論理が中学生になってからでは全く通用しないということは、ほとんどの教師が知っている。力のない教師や傍観者的な教師ほど、まだそんなことを言っている。

6 「そうしている自分が誇らしい」と思えるようになるまで

子どもの道徳的な行為や望ましい行為は、一見同じように見えても、先生にやらされている場合はとても不自然な感じがあり、先生の力が及ばなくなればすぐにやらなくなってしまう。本当に身に付いている場合は、とても自然であり行為に品格すらある。

そうなるためには「そうすることがよいことだ」という価値観を子どもが自分の中に確立するまで、教師のあきらめない指導が必要である。そして、それができた子どもには、もう一步進めて、「そうしている自分が好きだ」、「それが自然にできる自分が誇らしい」、「みんなができていそうな自分の学校が誇らしい」、という自信と誇りをぜひ植え付けてやりたい。生徒指導で教師が目指すべき崇高な目標であろう。そこまでくると、その行為が個人の揺るぎない習慣となり、学校のよき風土や伝統になっていく。

7 ルールを守るだけでなく、望ましいマナーを身に付けた子どもに

「ルールからマナーへ」という目標をたてている学校があった。ルールもマナーも集団生活を行っていく上ではどちらも大切である。

ところで、ルールは守らなければならないという他律という面もあるが、マナーはきまりというよりは相手への思いやりが優先し、自律的で豊かな集団生活、社会生活へとつながる。大人になればなるほどこのような考え方で自分を律しながら生活していける子どもを育てたい。「おしゅれは自分のため、身だしなみは他人のため」という言葉もある。

Ⅲ 問題をもつ子をどう指導するか

1 問題をもつ子を指導するにあたって

(1) 問題行動の原因には多様な要素がある

子どもの問題行動やあるいは問題をもつ子を見る時、何故そういうことが起きているのか、その原因を探ることは大事なことである。なぜならば、それは対策や支援を考える基盤になるからである。

もちろん、そのことは決して容易ではない。それは一人一人によって違い、しかもほとんどが複合的な要因によって引き起こされているからである。しかし、問題行動を引き起こす要因を、基本的な枠組みのもとで考えることで、多くのヒントを得ることができる。

その要因は、生得的(遺伝的)な因子と環境的な因子に分けて考えることが一般的である。学校としては、その生得的な要因についての分析や把握は専門的な知識や技能が必要なために難しいが、それが「作用している」という認識はもたなければならない。

また環境的な因子としては、数多くのものが考えられる。その代表は、「社会全体の風潮」、「地域社会」、「家庭」、「学校」における価値観や判断基準、そこでの人との関わりであることは、論をまたない。それぞれが、彼にどのような影響を与えているのか、どんなストレスを与えているのかを考えることで、ある程度の理解はできていく。

ところで、私のようなものが、その要因のすべてにわたって論述することは不可能である。本レポートの主旨は、まさに「学校」の視点からこの問題を迫及することである。

ただし、次項ではこれまでの経験を通して感じた、家庭の問題に少しだけ触れてみることにしたい。

(2) 成育歴の中での家庭の大事な機能が欠如すると

問題をもつ子は、総じて家庭の「愛情不足」と家庭による「基本的な生活習慣の未形成」が指摘されている。母親を中心とする家族からのたっぷりの愛情を受けておらず、また年齢に相応しい躰もなされていないのである。経験的にもその指摘は十分に納得できる。

彼らは愛情が足りないために「人間不信」に陥り、「人とは温かいものだ」、「信頼できる」という人間の根幹とも言うべき情感に欠ける。また家庭が「癒やしの場」になっていないために、外でのストレスが癒やされるどころか、家庭生活がストレスとなり、より大きなストレスをためることになる。

さらに問題行動という視点から愛情不足をみた時に、それは極めて大きな問題である。一般に人間は長ずるに従って、自己の望ましくない行動への抑止力は、法的ないし道徳的な善悪の判断(もちろんその要素は残っていくが)から、他からの愛情・信頼へとシフトしていくからである。愛情不足ということは、いわばその行動にブレーキがかからない状態になっていくのである。

人間は、「自分を愛してくれている人を悲しませるわけにはいかない」、「自分を信頼してくれている人を裏切れない」、そんな“怖さ”を心の中にもつことが、正しい判断をするためにどうしても必要であることは、心理学が教えてくれている。

また、基本的な生活習慣が形成されていないということは、生活全般とりわけ集団生活

がうまくいかず、ストレスをためることになる。自分のことがしっかりと自分ででき、他とは自分の責任を果たしながら協調できる子どもには、とりたてた問題行動はみられない。幼少期からの基本的な生活習慣の形成は、健全な人格の形成にはもちろん、問題行動を未然に防ぐためにも欠かすことはできない。

このように考えてみると、愛情不足も基本的な生活習慣の問題も、彼に関わってきた大人の責任であるということがよくわかる。しかし、だからと言って「気づいた時にはすでに遅い」ということではない。難しいことではあるが、必要な時期に戻っていわば、「育て直し」をすればよいのであり、あきらめてしまうことはない。それには、彼を取り巻くすべての大人の理解と協力が必要なことは言うまでもない。

(3) 学校や教師ができることに目を向けるしかない

彼の問題行動が世の中の風潮や、家庭のあり方・人間関係と無関係であることは全く考えられない。しかし、子どもの問題行動をすべて社会や家庭の“せい”にすることはできない。なぜならば、子どもたちは平日の1日の生活時間の大半を学校で過ごしている。その時間が、平穏で楽しく満足できる時間なのか、不満足でストレスのたまる時間なのかによって、彼に与える影響が大きく違ってくるからである。

そんな中で、私たち教師ができることはどんなことであろうか、自分でコントロールできることはどんなことであろうか。マスコミをはじめとする世の中の風潮を止めることはできない、家庭の環境や親の養育態度を変えることも容易ではない。親は教師からの上から目線での指導では変わらず、むしろ反発を強める。親からもっと協力してもらえようという努力は必要だが、それがかなわないからといって、親への批判を強めたり、愚痴を言ったところで何の解決にもならない。かえって解決が遠のくばかりである。

ならば、私たち教師のできることは、学校や学校教育に関することだけなのである。さりとて、学校の制度やしくみは変えられない。変えようと思って変えられるのは、教師の指導のあり方や彼を取り巻く人間関係ぐらいである。

私たちは、自分たちの意思で変えられる視点、あるいは自分たちが責任をもたなければならぬ視点からのアプローチを試行錯誤しながらも、徹底してやり続けるしかないのである。「切り捨て」や「あきらめ」などは、学校や私たち教師の選択肢の中にあってはならない。たとえどんな問題であろうと、どんな子どもであろうと、「先生は君の味方だ、敵ではない」、「一緒に解決に向けてがんばろう」ということを心からわかってもらえたならば、改善に向かって動き出すことは間違いない。

その結果、「先生は自分を見捨ててはいない」、「信頼できる」となってきたら次の段階に進めばよい。世の中や家庭をいくら“くどいても”何も変わらない。

(4) 「排除の論理」で子どもが立ち直ったという話は聞いたことがない

かつて新潟日報の社説に「扱いにくい子どもの前に立ったときに教育者としての本質がはっきりと見える。教師の人格の幅が狭いほど、子どもに愛情がないほど、自分を中心に考えるほど排除の方向で考え、動こうとする。」とあった。正に“お見通し”である。

日報は、教育の世界にいる私たちに、「決してそんな教師はいません」と胸を張って言えるようになってくださいと求めているのであろう。私の忘れられない文章になっている。

「あの子が学級に居なければいい」、「あの子は面倒だ、大変だ」、「あの子は問題児だ」もちろんこんなことを口に出すことはプロの教師としては言語道断である。そのようなことは、極端に言うならば「思ってもいけない」のである。

そんな排除の論理で子どもに相對すれば、それは必ず教師の態度や言動に出て、子どもは反抗する。集団から排除されて反発を覚えない人間はどこにもいない。彼の立ち直りのためには、マイナスに働くだけである。

どんな子どもでも、心から「大切だ、かけがえがない」と思っていれば、それがたとえどんな指導の方法であろうと、それは大した問題ではなく、その教師の心が子どもに響き、子どもが変わっていく。

「人間は何を言われたかではなく、誰に言われたかで動くものである」という言葉がある。教師の子どもを思う心が「温かいか冷たいか」が生徒指導の一番の要であり、唯一校内の職員の共通理解という点では譲れないところである。

もっと言うならば、その教師に生徒指導をやる「資格」があるかないかということである。方法論や手だてについては、子どもの実態に合わせ、多様なものがあってよい。

(5) 「自分にも至らないところが」と考えられる教師でありたい

教育ほど、うまくいかなかった時の言い訳がたくさん用意されている職業はない、とされている。子どもが自分の思い通りに育たない時、子どもに自分の指導が通らない時にこそ、教師の本性が見てとれる。

「自分への厳しさ」が欠けている教師、力量のない教師ほど、子どもの欠点や力のなさを嘆き、保護者や地域を嘆き、はては自分の学校まで嘆き、そして自分ではなく子どもが悪いと「開き直す」。

公務員はサービス業である。教員が純粋なサービス業であるかの議論は別にして、例えば民間企業で商品が売れなかった時に、それを“お客のせい”にする企業があったならばたちどころに倒産するであろう。

近年では、サービスを受ける側が悪いからうまくいかないといった態度は教員以外の職業でみることはない。ひと頃あった民間企業への教員派遣研修は正にその意識改革のためでもあった。

子どもたちは、教師が自分たちをどう見ているか、教師はどこまで自分たちのために努力しているかをよく見ている。このような自己弁護を繰り返すような教師の態度は子どもに軽蔑され、口先だけの生徒指導は全く機能せず、やがては信頼をなくしていく。

子どもたちの教育とりわけ生徒指導には、トラブルや問題はつきものである。それを1つ1つ乗り越えていくことで教師としての成長もある。しかし乗り越え方を間違い、自分は悪くなく、すべてを他人や環境のせいにしては、成長どころか退化していく。

子どもの問題行動の原因は家庭環境も含め複合的であることは論を待たない。しかし、子どもは学校で多くの時間生活している以上、学校に何も責任がないということはありません。そんな中で教師は、「自分にも責任がある」、「もしも自分以外の担任だったら……」と自分を素直に振り返られる教師は成長し、同じ間違いは繰り返さない。

教師である限り、子どもの問題に対しては、もしかして「自分の努力が足りなかったのではないか」、という「自らへの問いかけ」を続けていきたい。

(6) 厳しい指導をはき違えてはいけない

生徒指導には、厳しさは必要である。しかし、厳しい指導を勘違いし、教師の指導に従わないから、集団の秩序を乱すからととって子どもを怒鳴ったり、上から押さえつけたり、あるいはみんなと同じ事をさせなかったり、はたまた集団から排除したりする生徒指導を見ることがある。それはもはや指導というより制裁である。

一時的に子どもは、教師からそうされることが嫌で、それに従ったフリをするが、それは指導が功を奏したのではなく、「注意を早く終わらせるための単なる処世術を身につけた」に過ぎず、子どもが立ち直ったわけではない。子どもに残るのは憎しみだけである。

子どもには世の中の厳しさも教えなければならないという意見や考えもある。しかし、世の中の厳しさは、教師が敢えて教えなくとも、普段の生活を通して子どもは、常にひしひしと感じているし、時期がくれば否応なしにその荒波にさらされる。

発達途上の子どもが、それに耐えられる体力がつく前につぶれてしまったり、ひねくれてしまったのでは、元も子もなくなる。学校時代は体力づくりの段階である。

それよりも、今は子どもに、教師がどうしても教えなければならない、感得させなければならないのは「人間の温かさ」である。どんな子どもでも愛情をもって“抱えて直す”という姿勢が子どもの立ち直りを確かなものにしていく。

厳しい生徒指導とは、子どもが立ち直るまで、学級の一員として本当に認められるまで責任をもって支援していく、という教師自らのへ厳しい指導を言うのである。もちろんその過程では厳しい叱責もあるであろう、しかしどんなことがあっても、途中で彼を見限ったり、見捨てたりしてはならないのである。

再び新潟日報の社説から引用したい。「子どもを変えられるのは、威圧や強権ではない。何度裏切られても寄り添い続けることであり、それが子どもをはぐくむということにほかならない。」私たち教員は、二度とこんな指摘を受けたくないよう、思いを新たにしたい。

(7) 「いい子になったら」ではなく「いい子になるまで」関わるのが生徒指導

学校訪問を通して強く感じたことがあった。ある大規模校で、年度当初、特定の学年全体が問題傾向をもち、どの学級もやや同じような状況の学校があった。しかし、程なくすると子どもが落ち着き授業にも集中できるようになってきた学級と、依然として問題傾向をもち、授業がなり立たない学級に次第に分かれてきた。その一番の要因は、見たところ、担任の姿勢とその指導にあった。

それは、「いい子になったらかわいがってやる」、「悪い子のうちは相手にしない」というタイプで子どもを突き放している担任がいた。そこでは、先生から指導してもらうためには「いい子」にならなければならないのである。子どもが反発して当然である、

もう一方は、「いい子になるまでかかわり、一緒に成長していこう」、「問題をもつ子ほど、かわいがっている」というタイプで、どんな子どもも抱えようとしている担任がいた。ここでは、いい子は担任の手から次第に離れていっても安心であった。彼らは自律的な生活が送れるようになっていったのである。この差であった。

生徒指導で一番大事なことは、「いい子になるまでかかわり続ける、悪い子ほど先生の助けが必要である」、「いい子になるためにこそ先生が必要である」ということである。先の担任は、きわめて当たり前のことを見事に体現していたのである。

(8) 生徒指導では「失敗」という言葉はあってはならない

「失敗を失敗で終わらせるから失敗であり、成功するまでやればそれは失敗ではなくなる。」これは企業人、松下幸之助の言葉だと言われている。“モノづくり”ではない、“人間を育てている教師”こそ肝に銘じなければならない言葉である。

「あの子の指導は失敗だった」、「学級経営が失敗した」、こんな物言いは教育においては許されない。なぜならば、教師は再び新しい学級をもち、「失敗を生かして」などと言うかもしれないが、その子の小学生時代、中学生時代は二度と戻らないことを考えれば当然のことである。

子どもへの指導の過程では、うまくいかなかったり、子どもの反発を受けることは珍しいことではない。しかし、そこで排除したり、投げ出してしまうとそれが失敗になる。粘り強く、粘り強くやっていくことしか、私たちに道はない。

教員採用試験の面接で、「教師に一番必要な資質は」と問われたある受験生が、「根気強さ」だと答えたという。きっといい教師になるに違いない。

(9) 「この先生についていけば」という安心感・信頼感をもたせることが大切

「自分を信用してほしいという前に信用してもらえ人間になれ」という言葉がある。誰でも、信用している人には情報を提供したり、自分から相談したりしながら側にいて安心していく。この「安心」という感覚は、常に心が揺れている子ども、問題をもつ子にとっては、とても大事である。

教師の中には本当によくいろいろな子どもの情報をもっている人がいる。例えば、子ども同士のトラブルなどは、教師が外から見てわかるような時には、事態は相当進み、深刻になっている。そんな時、当事者でなくとも誰でもいいので、その事実を出来るだけ早く教師に知らせてもらえれば、早い解決をみることが出来る。とにかく、子どもが信頼し、安心して何でも相談できる教師になることが、生徒指導上は、とても大事なことになる。

生徒指導では、時として“いざ”という場合には、子どもに「言うことを聞かせなければならない時」がある。その際にものを言うのが、「先生が言うのであれば」という信頼関係である。ある意味、日頃の触れ合いはその時のためにあると言っても過言ではない。

では、どうすれば「信頼される教師」になれるかには、種々の要素があるだろうが、例えばこんなことではないか。何と言っても「授業がうまい」、さらには「よく話を聞いてくれる」「うそは言わず信用できる」、「弱い者の一番の味方」、「親身になってくれる」、「悪口は言わない」、「公平である」、「裏表がない」、「約束は守る」などいろいろあると思われるが、教師としてどうかという前に、「人間としてのあり方」が問われる問題でもある。

(10) 担任が一人で問題を抱え込まず積極的に協力を仰ぐ

子どもの問題について、状況や問題の質によっては、担任が一人で悩んだりすべてを抱え込んだりしないことが大事である。

早めに管理職をはじめ、学年部ほか教師間に広く現状の共通理解を図り、子どもの実態に応じたバックアップ体制や支援チームをつくり、明確な指導方針と手だてを定め、全員が一致して指導にあたる必要がある。担任と言えども、一人でできることは限られている。積極的に他に協力を仰ぐ姿勢は必ずや解決を早めていく。

その際に大事なことは、欲張らず、スモールステップで彼ができそうな到達目標を定め、

それを全職員が共有し、分掌や組織を生かしながら自分のできることを通して彼に関わっていくことである。さらに、その途中経過を報告し合い、次の段階に進むための話し合い(いわばカンファレンス)を定期的に関くことで指導が効果的になされていく。

2 問題の発見や対応は、早ければ早いほどよい

(1) 子どもの問題は“ある日突然”はない、できる限り事前にキャッチしたい

学校での事故やケガについては、全く予測できないものの中にはあるが、生徒指導上の問題などは、「ある日突然やってくる」ということはなく、ほぼ前兆となる問題やサインがある。「今日はおかしいな」、「最近変わったな」、「ヒヤッとした」そんな感じや、自分の指導に対する予想外の反応、リアクション等には、すぐに対応し早期の解決を図りたい。

子どもの何気ない一言や表情、態度に、現状への不満や心の悩みの一端が現れる。要は教師が、それを前兆やサインととらえる経験や感性をもっているかどうか、またそれを常に読もうとしている姿勢があるかどうかにかかっている。

問題の前兆に気付かない教師にとっては、変化はいつも「ある日突然」起きることになる。その時にはもう遅く、特別な対応に迫られ、何倍もの時間と労力を要するのである。

ところで、すばやい対応が学校でなかなか実践できない要因は、それを取り上げれば面倒になるので見て見ぬふりをする、できれば自分だけで処理したいというプライド、それに教師が常にもっている多忙感である。

教師は、学校でのそれらの習性や困難を超え、むしろ“見えないものを見ようとする努力”、“聞こえないものを聞こうとする努力”こそが、生徒指導の問題を事前に感知し早期に解決する何よりの力になっていく。

(2) 教師の「気になる」という感覚はとても大事

生徒指導だけではないが、教師の「気になる」という感覚は重要である。その感覚は、冷たく神経質なものであってはならないが、例えば次のようなことである。

教室の机が乱雑になっていることが、気になるか気にならないか、ロッカーや掲示物の乱れが気になるかならないか、教室や廊下のゴミが気になるかならないか、他のクラスの黒板に忘れ物をした子どもの名前があることが気になるかならないか、全校朝会で下を向いている子どもが気になるかならないか、服装のだらしない子どもが気になるかならないか、休んだ子どものことが気になるかならないか、いつも一緒にいる子ども同士がいないことが気になるかならないか、挨拶の音がふだんより小さいことが気になるかならないか、など挙げればきりが無い。

そこで気になれば、必ず何らかの手をうったり行動をとることになる。それがとても大事である。ただし、その根底に教師の温かさや思いやりがなければ、それは指導ではなく、ただ自分の気分がそれで不快か不安定になっているだけであり、教育的な意味はない。

(3) 前兆を確実にキャッチし、そしてそれをキャッチしたならば

前兆をキャッチできるかどうかは、もちろんふだんからの子どもとの触れ合いがものを言う。子どもの「ふだん」がわからなければ、違いや前兆を見つけようがない。

また、その前提としては、子どもへの高い関心と子どもを思いやる心がなければ見えてこない。またその行為は、教師自身の心のゆとりから生まれてくる。教師自身がイライラしている時には見えるものも見えない。

そして前兆をキャッチしたならば、すぐに声をかけ、まず子どもの気持ちに寄り添いたい。子どもの話に真剣に耳を傾け、少なくとも、今は不安であること、不満があること、切ない気持ちでいること、悩んでいること等の実情に共感を寄せていくことが大切である。

そこでは、決して教師の立場からあれこれ評論したり、あるべき姿を説きながら叱責してはならない。そうすると、子どもは本当のことを話すのを止める。

子どもにとって自分の本当の気持ちを教師にわかってもらえた実感は、必ず大きな問題につながる前のブレーキになっていくはずである。

(4) 子どものこんな状況には注意したい

経験的ではあるが、大きな問題につながりかねない問題状況として、例えば次のようなものがある。通常はこれらが一人の子どもに複数現れてくる。

「すべてに無気力でやる気が感じられない」、「自分勝手な振る舞いが目立つ」、「集団行動ができない」、「絶えず落ち着きがない」、「授業中の私語がある」、「服装がだらしない」、「服装や持ち物が友だちより目立つ」、「時間にルーズ」、「整理整頓ができない」、「友だちへの不用意な言動がある」、「集団の足を引っ張る」、「教師やリーダーにわざと逆らう」、「友だちとのトラブルが多い」等である。

また集団が崩れる兆候としては「学習や活動に前向きではない」、「しらけた雰囲気がある」、「人の話を聞かない」、「正論が通らない」、「友だちには無関心」、「リーダーが育たない」、「グループ同士の反目が目立つ」、「特定の仲間と群れて歩く」、「影のボスがいる」等、これらはほんの一例で、まだまだたくさん気になる状況はある。

重要なことは、気がついたら決して先送りせず、できるだけ早く、改善するまで根気よくかわり指導していくことである。また、問題をオープンにし、積極的に他の職員や保護者の協力(子どものプライバシーや名誉に気をつけながら)を仰ぐことも必要である。

(5) 社会では許されない行為は学校でも許されない

暴力や傷害、窃盗など法律でも禁止されていて、明らかに社会でも許されない行為については、どの教師も見逃すことなく毅然とした態度で接することが大事である。

時には、たとえ学校内で起きたことでもその事故の程度に鑑み、校長の判断で、児童相談所や警察など関係機関への通報や協力を得ることも必要である。(もちろん教育的な見地から慎重になされなければならないが)

その際に特に注意したいことは、学校のそのような生徒指導に関する指導姿勢や対応は、事前(年度当初)に子どもや保護者に十分な説明と理解を図っておくことである。

そして学校でできることは可能な限りやり、自らの責任を感じながらも、その権限や指導の範疇を超えるものについては外部機関の協力を得ることにし、安易に頼らないことが大事である。そして、それを子どもや保護者への脅しの材料に使わないことである。

このことへの配慮が足りないと、子どもや保護者との信頼関係が破綻し、むしろ別の新たな問題を抱えてしまうことが多くある。

3 問題をもつ子がグループ化している時には

問題を持つ子は、往々にしてグループをつくりたがり、集団で行動することが多くなる。それが学級を超えてグループをつくったり、ましてや中学校では他校の生徒と結びついているような状況が見られる時には、指導は困難を極める。ここでは、グループの問題について若干考察してみたい。

(1) 共通のストレスで結び付いている

人間が集団をつくる時には、何か共通の目標があり、それを協力しながら達成しようとする時が最も建設的なグループとなる。また一般的には、共通の話題や趣味を元に、気の合う者同士がグループをつくっていることが多い。

ところが問題をもつ子どもたちのグループは、そういう結びつきではない。敢えて言うならば、お互い同士決して仲がよいわけではないのに、グループをつくっている。その理由は、彼らはそれぞれにストレスを抱えている、そして同じようなストレスを抱えている子どもたち同士が、それを元につながりを強めグループ化しているのである。

そのストレスの代表は、教師に対する不平不満や特定のリーダー、個人に対する不満、誰も認めてくれないことへの不満、厳しすぎる規則に対する反発、授業がわからないことへの閉塞感、親への不満などである。そしてそれがいくつ重なっている場合がある。

そこで、生活全般に前向きでないグループについては、どんな共通のストレスで彼らが結びついているかを探ることは、改善に向けてはとても重要なことである。

(2) 良くない行為のハードルはすこぶる低くなっている

一人にいる時はそうでもないのに、グループになると平気でよくない行動をとるという話をよく聞く。それは当然の成り行きである。よくない行為を行うに際して、「自分だけではない」という気持ちが強く働き、ハードルがすこぶる低くなるために、判断がとて甘くなり簡単に超えてしまうのである。

また、その行為について感ずる責任も、グループの人数分に分散されるために、極めて希薄になっていく。これがグループの自然な姿であり、グループの、見えないがしかし大きな力として、メンバーの行動や考え方に大きな影響を与えている、いわば魔物である。

(3) ボスの考えが集団の空気を支配する

どんな人間でも、集団が形成され、そこに所属していれば、その集団で一番居心地のよい考え方や行動をとろうとする。それを支配するのは、いわばその集団の空気である。メンバーは暗黙のうちにそれを感じながら生活している。

通常その空気をつくっているのは、その集団に一番大きな影響を与えているリーダーである。リーダーの考え方や行動がその集団の空気をつくる。そして、メンバーは多少の息苦しさを感ずるにしても、それに従うことで集団に所属してられる。

問題をもつ子どもたちのグループにおけるリーダーは、いわば“ボス”と呼ばれる子で、メンバーは彼の顔色を伺いながら生活することになる。そこでは、一人一人の自由な考え方や行動は極力抑えられ、逆らえばグループにいらなくなるばかりか、厳しい制裁を受

けることになる。強い結束を保っている裏の事情である。これらのグループは、程度の差こそあれ、皆このような体質をもっている。

(4) 一人だけグループを抜けさせようと思っても難しい

生徒指導で、「彼はグループを抜ければよくなる」、「一人でいる時は何でもない」といった理由から、無理にグループを抜けさせようとすることがある。本人が強くそう願っているのであれば、その覚悟を応援し力にならなければならないが、そうでなければ、それは必ず失敗する。他のメンバーは強く反発し、より結束を強めたり、その子へのひどいじめや嫌がらせが始まることもある。

教師の力でたとえグループから抜けさせたにしても、彼らは毎日学校で顔を合わせる、その後も普通の関係でいられることは全く考えられない。むしろ彼の苦しみが増すことは目に見えている。その苦しみに耐えられるような強い子であれば、はじめからそのようなグループには所属していないはずである。

グループ解散へのアプローチは、なんとしても“ボス”への働きかけ、立ち直りへの指導を最優先で、しかもあきらめず継続して行わなければならない。それを抜きにして、周りを引き離そうとしても、子どもたちを混乱させるだけである。ボスが変わることで、グループの体質が変わるか、グループが自然と消滅していくかのどちらかになっていく。

(5) グループが問題ではなく、そこにしか居場所がないことが大きな問題

よく「グループがあるからよくない」と考えている教師がいる。しかし問題はグループがあることではなく、彼がそこにしか居場所がないことが問題なのであり、そう考えなければいつまでたっても抱えている問題は解決しない。

それには、学級の間人間関係づくりが大きなポイントになる。まず学級では、どんな友だちとも自然な交流ができ、少なくとも「嫌いな者はいない」、「話の出来ない者はいない」というレベルにまで人間関係をもっていきたい。その上で、友だちのことを心配し、みんなと伸びようとする人間関係ができれば理想的である。

学級でそんな人間関係ができていけば、彼の居場所も必ずできていくはずである。そしてその居場所が本物になるには、彼が集団に貢献する役割をもち、みんなに期待され、自分はこの集団にはなくてはならない存在だと認識するようになることである。そうなった時には、彼の学級における問題行動は間違いなくなくなるはずである。

(6) 教師も共にという姿勢がないと改善に向かわない

教師は、グループのメンバーが共通にもっているストレスを解消するためには、一緒に解決策を考えていくという姿勢が大切である。時間はかかっても彼らと向き合い、彼ら自身が気付くまで、我慢比べをするくらいの覚悟は必要である。

結果を急ぐ余り、彼らに対して「ああしろ」、「こうしろ」の指示・命令は彼らが体質的に最も嫌う指導であり、何の効果もない。

それよりも、グループとしてみんなですみこむことはいないか、前向きな活動はないか、少しでもみんなのためになる活動はないものかと教師と共に考え、それを教師も一緒になってやってみる。そうすれば改善の兆しは必ず見えてくる。

なぜならば、彼らには、教師からもっと自分たちを見てもらいたい、もっと関わってもらいたいという要求が必ずあるからである。継続的なボランティア活動などが一緒にできれば言うことはない。

4 立ち直りのための支援

問題をもつ子どもを立ち直らせるための基本は、“彼を丸ごと受け入れ、決して見捨てず、期待をかけながら少しの進歩でも認め、立ち直りを信じていくこと”である。

現場では、他の子どもたちの迷惑になるから、社会の厳しさを教える必要があるからと、学級集団から排除して立ち直らせようとしている実践があるが、そんなやり方で本人が立ち直ったという話は聞いたことがない。

もちろんその状況によっては特別な指導や個別の支援が必要なことは言うまでもないが、どんな状況の時でも、学級集団の一員として認められ活躍できるようになることを遠景に置かなければ、彼は決して立ち直ることはない。

古くから「問題をもつ子は学級の鏡である」と言われている。彼の成長への取り組みを通して、むしろ変わったのは本人よりも学級であり、中でも一番変わったのは担任であったという実践例がいくらかでも紹介されている。励みにしていきたい。

(1) 指導にあたっての心構え

① 見て見ぬふり、無関心だけはあってはならない

マザー・テレサは「愛情の反対は憎しみではなく無関心である」と言っている。そんな偉大な言葉を引き合いに出すまでもなく、彼らに指導にあたっては、きわめて大事な心構えである。彼らにとって、周りの者の自分への無関心ほど切ないことはない。

とりわけ教師の無関心は、子どもの心も著しく傷つける。特に問題を持つ子はそのことに敏感であり、自分をどうみているかで教師を峻別する。自分は相手にされていない、関心をもたれていないとなれば、その教師に対する反抗的な行動をエスカレートさせていく。彼らは厳しく指導されたからといって反発するわけではない。(もちろん愛情を根底にしたものでなければならぬが)

また、よくない行為の見て見ぬふりは、生徒指導の重要な機会を失うことになる。そのような行為を一度でも見過ごせば、次には同じような行為を注意することができなくなる。一貫性のない教師の気まぐれな指導に対しては、子どもたちは反発を強める。

教師は全員が同じ指導方法ではなく自分の持ち味でその子に関わればよい。しかし「事実に基づかない指導」、「子どもが理不尽だと思ふような無理のある指導」、「自分のやった行為に比して著しく重いと感ずる叱責や懲戒」は、子どもの納得は得られず、反省がなされないどころか、逆に反発を強める結果になるだけに、厳に慎まなければならない。

② 問題の解決はその子どもの生活全体の見直しから

問題をもつ子どもは、その行為や行動だけを直そう、止めさせようとするのではなく、生活全体を見直していく必要がある。なぜならば、彼の生活全体における閉塞感がある種の問題となって現れていると考えられるからである。現実的には、学習に無気力な子ども

は、ほとんど生活全体に無気力なことが多い。

彼らもっている生活上の大きな問題の典型としては、「学校で楽しいことが何もない」、「学級や友だちに受け入れてもらえていない」、「理想の自己と現実の自己とのギャップを埋められず見栄を張っていることに疲れている」、また「将来に向けての明るい展望がもて、ずどうしていいかわからない」、「自分が夢中になれるものがない」などがみられる。そしてやっかいなことに、そういう子どもたちは、一般に地道な努力を嫌い、根気強さにも欠けるため、すっきりとした問題解決には至らないことが多い。

またさらに、家庭内における問題や悩みで押しつぶされそうになっている子どももいる。学校では見えないつらさや心の声に耳を傾け、共に考え支援することができれば、子どもが変わっていくこともある。

しかし、特に中学生は、親への不満は口に出しても、他人のせいには出来ない家庭内の人間関係や個人的な悩み、いわば他人には決して触れてもらいたくないと思っている本音の部分は、ほとんど自分から教師に打ち明けることがない。そこに解決の難しさがある。

生活全体の見直しの一般的なポイントとしては、まず「自分のこと、自分でできることは自分でやること」を少しずつ進めていくことである。そして、「自分の身の上で起きている問題の原因を、他にばかり求めるのではなく、自分の考え方や行動にも目を向ける態度を養っていくこと」、「自分の方から、あいさつやコミュニケーションをとろうと努力すること」などであろう。もちろんこれについては、子どもの実態に応じたアプローチが必要なことは言うまでもない。

③ “みんなの迷惑になっている” という指導では子どもは反発するだけ

例えば、授業中の問題行動に対し「みんなの迷惑になっているから止めなさい」一辺倒では、子どもは次第に“排除の論理”を感じ取り、ますます荒れていく。

「君はこの世で一人しかいない大切な人間だ、自分を大事にしていこう」、「君はかけがえのない学級の一員だ、それでよいのか」、「君自身のために直していかなければならない」という、“抱えて直す”姿勢を徹底していくならば、少しずつでも子どもは変わっていく。

子どもは「先生は自分のことを本当に考えてくれている、わかっている」と認めた時から指導を少しずつ受け入れるようになる。そのためには、「真にこの子のためを思う愛情」、「支援を諦めずやり続ける根気」、「子どもの立ち直りを信ずる心」が特に重要である。このことは、問題行動を示すすべての子どもに共通する指導の原則であろう。

④ その子の少しの改善・進歩でも認め、共に歩む姿勢が何より重要

注意ばかりの交流では教師と子どもとの人間関係はどんどん悪くなっていく。ふだんの何気ない、互いにフラットな立場でのコミュニケーションが大切であり、それを重ねることでやがて彼も心を開いていく。そして少しの改善、進歩を見逃さずタイムリーに認めていく。とりわけふだん注意をしている行為については、その改善が見られた時を決して見過ごしてはならない。そのときには、必ず認め褒めてやりたい。

問題をもつ子どもは、一般にこれまで叱られた経験は多くあっても、褒められたり認められたりする経験が不足している。まず教師がそのことを認識し、その経験を積ませてやらなければならない。しかし、彼らに対する「お世辞」や「おだて」は見抜かれ逆効果と

なる、あくまでも事実在即して褒めなければ意味がない。

そこで大きな力を発揮するのが、「個人内評価」である。彼を褒める基準を、教師の描く年齢相応のあるべき姿や他の子どもと比べるなどの「外」に置くのではなく、彼の「内部」に置くのである。

つまり、以前の自分と比べてどこまで伸びたか、どんな努力があったか。また、彼の中で優れている点はどこかなどを、確実に見取り褒めていくのである。そのために教師は、関心をもってその子に寄り添っていなければ、それが見えてこない。

そして具体的な問題の解決にあたっては、「子どもと共に歩む」、「先生は君と一緒に何ができるか」という姿勢が重要である。そこでは、教師も彼自身の目指したい目標の設定に関わり、その達成プロセスを見守っていく。

気をつけることは、いきなり大きな目標を立てて取り組ませるよりも、小さな目標を何度も達成させ、その成功体験を励みやエネルギーにさせることが大事である。

そして、その目標達成をいつでも応援してくれている人がいる、という安心感を与え続けていきたい。やがてそれが、本人の大きな自信と成長につながっていく。

「がんばれという人が一番がんばらなければならない」という言葉がある。私がこれまで忘れないようにしてきた、大事な言葉である。

⑤ 指導が難しい子どもほど「どう気付かせるか」しかない

元プロ野球楽天の野村監督は、監督の仕事は「気付かせ屋」とであると称した。「選手は他人から言われたからと言って、その通りにできるものではない。いかに自分で自分の欠点に気付き、直そうと努力するかである。それができる選手は伸びていく」というのである。したがって、監督やコーチの仕事は、選手が自分で気付くようなヒントを与えることだと言っている。

生徒指導にも同じ事が言える要素がある。特に指導の難しい子どもやその保護者は、他から注意や忠告をされたり、自分の欠点を指摘されることを極端に嫌う。(だから指導が難しいのだが)自分はいつでも正しいと思っているので、自分の非は認めない、注意をすればするほど反発する。ではどうするのか、「気付かせることしかない」というのが、考えられる結論である。

そういう子どもは、たいてい過去に他人を信じられなくなったつらい経験をもっている。彼らにこそ、裏切られても裏切られても寄り添い、「先生は信頼できる」と確信してもらえれば、必ず変わっていくはずである。

子どもに変わり目が見えれば、親も変わっていく。場合によっては、親が先に教師に信頼を寄せてくれ、その力で子どもが変わってきたというケースもある。

⑥ 学級の子どもたちに頼る前に教師があきらめない姿勢を示し、相談のパイプも太く

問題をもつ子どもが、教師の手に負えないから、これは学級の問題だからと言って、学級の子どもたちにいわば“丸投げ”をして彼を立直らせようとするのは困難である。

大多数の子どもたちには教師のもつ、いわゆる教育的な配慮がないため、その子の立場に立った支援は期待できず、「やってもダメだ」という開き直りも早い。また、他人のこと、面倒なことには関わりたくないという思いの子どもも近年とても多くなってきている。

そして何より、教師のその“逃げの姿勢”を子どもは敏感に察知する。まず何といても教師の責任ある「あきらめない取組み」が第一で、子どもはその教師の姿勢を見習い感化を受けていく。

教師の粘り強い実践は、やがて多くの子どもの心を動かし、自分たちのできることをやり始め、合わせて担任への信頼と学級に対する安心感を生んでいく。

その過程では、とりわけ彼を心から心配したり、学級に正義や公正さを取り戻そうとする者が出てくる。そんな彼を守り、育てていくことも教師の重要な努めである。何より正しい行為を実践しようとする者が、学級のみんなの支持を得ることに全力を注ぎたい。決して彼を孤立させてはならない。彼が孤立した時には、学級集団は崩壊していく。

もちろん子どもの問題は早期発見、早期対応が第一である。しかし一人の教師の観察には限界がある。教師は一人一人の子どもと、彼らの方から何でも、何時でも安心して相談できる太いパイプを通しておく必要がある。それがたくさんの教師との間にできていけば言うことはない。

(2) 状況の正確な把握と児童生徒理解

① 彼を取り巻く切ない状況は理解したい

社会的に許されない行為や道徳的に間違った行為は教師として見過ごすことはできないが、今の彼にはそうするしか選択肢がなかったこと、追い詰められそうせざるを得なかった状況や心情には心を寄せ、理解に努めたい。時間はかかっても、その姿勢がなければ、いつまでたっても彼は心を開かず、生徒指導は始まらない。

臨床心理学者の河合隼雄は、「思春期の子どもは自分の心の中に起こっていることを言葉で表現できない。したがって、自分の心の中の問題に見合うだけの外的な事件を引き起こす。それは無意識のうちになされる一種のコミュニケーションのようなものである。そして、そのことをよく理解している大人がそばにいと、子どもは安らぎや心強さを感じず」と言っている。私があらゆる生徒指導の問題を考える時に、もっとも大切にしているメッセージである。

② 問題を持つ子のプライドは高く、被害者意識も強い、勉強の面倒をみたい

問題をもつ子どもは一般にプライドが高く、集団や異性の前で恥をかかされることや、特別な扱いを極端に嫌う。

例えば中学校で、授業時間中に、やむを得ず別室で指導することになったにしても、「みんなが迷惑しているから」という理由(集団生活ではありうるが)だけでは到底納得せず、彼のプライドを傷つける。自分のやったよくない行為は忘れても、大きなペナルティを与えられたというその悔しさや恨みは、いつまでも消えることはない。

その時には、「あくまでも自分と冷静に向き合い、自分のできることをやっていくには、この時間とこのやり方が今の君にとってはどうしても必要であり、教師も一緒に勉強や活動をしていく、決して排除したわけではない。」このことをよく理解させていきたい。

また彼らの口癖の中に「何で自分ばかり」、「いつも俺たちだけ」というものがある。注意を受け続けている彼らの不公平感や被害者意識はとても強いものがある。

さらに彼らは一般に、地道な努力を嫌うので学力が振るわない。しかし、そのプライ

ドが邪魔をし、授業中はわかったフリをしなければならない場面もあり、学習に対する不適応感や劣等感も大きなものがある。彼の勉強の手助けをするなど、学習面からのアプローチも必要になる。

子どもは、どんな子でも勉強ができるようになりたいと思っている。この心情をよく理解した上でないと、建前的な指導や一方的な指導では、立ち直ることは難しい。

③ 周りに彼らを支持しているグループがいることもある

教師に反抗的な態度をとったり、集団の規律を乱したり、前向きな者の足を引っ張るなどの問題行動をとる子どもたちは、たいていは教師の指導に対する反発が根にある。

反発を受ける指導の典型は、子どもの言い分を聞かない高圧的な指導か、成績がよいなど特定の子どもだけをひいきする差別的な指導である。

ところで、そういう実態のある学級や授業では、自分を安全な立場に置きつつ、自分たちの代弁者として、問題をもつ子たちの反抗を陰で支持している子ども、特にストレスをかかえた女子の集団がある場合がある。

問題行動をとる者たちは、そのグループからの支持を失いたくなく、格好をつけながらその暗黙の期待に応えようとする。その構図の中では彼らの立ち直りは困難である。

そのグループの指導、個々のストレスの解消を同時に行うことが必要である。かといって彼らを学級集団から孤立させるということではなく、彼らの言い分を聞きながらみんなの中に自然に溶け込ませなければ問題の解決には至らない。

④ 彼らにいじめられている子がいることも多い

いわゆる荒れている子どものいる学級には、ほとんど、陰でいじめがあると考えてよい。彼らは、憂さ晴らしをする相手を常に必要としている。学級の中で一番弱い立場の子、先生や親に「自分はいじめられている」とは言えないであろう子がターゲットになり、口封じも合わせて行なわれている。ひどいときには恐喝も行われている。

その子は誰にも助けを求められず一人悩み苦しんでいる。周りの子どもたちも知ってはいるが、彼らから自分を守るためには手を出せない。とりわけ切ない立場の子は、使いつわりをさせられたり、「いじられる」ためにグループの中に置かれている子どもである。グループから抜けるに抜けられないでいる。

一刻も早く、教師をはじめとする大人が気づき、グループ全体の改善を図る中で救ってやらなければならない。この問題に関しては子どもたちだけの解決は無理である。

教師はとにかく、表面的な集団規律維持の問題に関心を向けがちになるが、その陰にあるであろう、いじめ、中でも恐喝、暴力などには細心の注意をもって早期に発見し、すぐに被害者を守る対策をとり、完全な問題の解決まで見届けることを何より優先したい。

(3) 具体的な直接支援

① 彼らとの日ごろのコミュニケーションの見直し

彼らとの日ごろのコミュニケーションが、いつも指示や注意に偏っていないかをふり返ってみる必要がある。

顔を合わせれば注意を受けることがわかっている人を避けようとするのは当然である。

人間は誰でも、自分の良さを認めてくれなかったり、人として尊重してくれない人からの注意や指導は決して受け入れない。

まず、彼らとは日ごろからどんな質のコミュニケーションがなされているかを冷静に振り返ることから始めたい。賢い子どもほど立場を考えて従っているフリをしている事は多く、教師は時にそれを錯覚し、どの子どもに対してもそのような態度を強要することから問題が生じてしまうことがあるので注意したい。

ところで、相手との会話では“「言葉」ではなくその「意味」を考えてから言葉を返そう”という戒めや、コミュニケーションとは「情報と感情のやりとりである」ということもよく言われる。教師が子どもと話をする時には、そのことを忘れてはならない。

頑張り屋の子どもは、「大丈夫です、がんばります」とどんな時でも言う。弱音をはけないがために苦しむ。また素直でない子どもは、「心と反対のこと」を言ったりして後悔していることがある。あるいは口べたな子どもは、「黙ってしまう」ことで反発しているのとられてしまうこともある。いろいろなタイプの子どもがいる。

子どもと対話をするとき、特に悩みや困ったことの相談や不平不満を聞き取る時には、単なる言葉と言葉のやり取りではなく、その子どもの本当の気持ち、「心の声」を引き出し、まずそれを受け入れ、その気持ちとの真摯な対話に心掛けたい。それが子どもとのコミュニケーションでは一番大事なことである。そのことにより子どもは教師を信頼する。

② 彼らを褒めたり、認めたりする機会を積極的につくっていく

ふだんの学校生活においては、何もしなければ、彼らを褒めたり認めたりする機会はほとんどないであろう。数少ない褒める機会は注意をした後である。少しでもそのことが改善されたと思った時にはすかさず褒めたい。ある意味では、「褒めるために叱る」という気持ちをもっていることが大事である。

また、そういう子どもに対しては当面、他の子どもと比べたり、あるべき姿を基準に評価するのではなく、個人内評価を駆使し、彼の中での少しの進歩や、彼の中で優れている点を積極的に認め、声がけをしていく。しかし、「お世辞」や「おだて」は禁物であり、あくまでも事実即して行う。

一般に子どもをほめようとすれば、まず子どもに関心をもって寄り添い、子どものがんばりや変化を自分の目で見て、そのプロセスや結果をタイムリーに褒めてやらなければならない。その営みは生徒指導には欠かせない。

しかし、ただ自然のままに任せていたのでは、なかなか褒めるチャンスのない子どもには、ある種の「仕掛け」が必要である。周到な準備とさりげないサポートで「自分でやれた」と胸を張らせ自信をもたせたい。

更に、自分のよい点を認めてくれている、また認めようとしてくれている人間とは人間関係は必ずできていく。人間関係づくりはそんなに難しいものではない。教師はこのことを忘れなければ必ず子どもとの関係はできていく。

とりわけ、今日その子を褒めたい、今どうしても褒めてやらなければならないと思う時がある。その時には、「探してでも褒めに行く」心掛けと実行力が必要である。

翌日では、その意味は半減する。子どもの喜びは、褒められることもそうであるが、そこまで自分を気にかけ、注意を払っていてくれていたことにとっても感謝をするのである。

③ 問題を起こした子どもを集団でまとめて指導することはむしろ害になる

問題を起こした子どもへの一括集団指導は、彼ら同士お互いのプライドや強がりがあり、そして何よりも、彼らの考え方や行動を縛っている「オキテ」やボスの顔色とその場の空気を支配するため、真実や本当の気持ちを引き出すことはほとんど不可能である。

またそのよくない行為も、同じ事をした仲間と一緒にいることで、自分だけではないという心が強く働き、責任が何分の一かに薄められ全く指導の効果がない。

ましてや子ども同士の問題の発生直後に被害者と加害者を同席させて事実確認や指導を行うなどは、最もやってはいけない生徒指導のイロハである。

特に事実を確認するための事情聴取は、どんなに人手がかかっても、時間がかかっても必ず一人ずつ一斉に行うことが、問題解決に向けての生徒指導の鉄則である。そしてそれは、できる限り事実が一致するまでねばり強く行っていく。真実に基づかない指導は、いくらやっても意味がない。

またその後の指導も個別に行い、個の変容を図っていく。当然その反省や立ち直りには個人差もあり、全員に同じ指導をすることはむしろ不自然である。そこでの、加害者が同じ事をした仲間に対してもつ不公平感については、よく説明し排除していく必要がある。

加害者への集団指導は、全員が反省し、前向きな姿勢になり、今後に向けての話し合いや共通理解が必要になった時に行えばよい。保護者への対応も基本的には同じである。

④ 彼らの仲間内のルールや“オキテ”をわかった上で指導にあたる

子どもは学校では、教師が守ることを期待している望ましい社会規範と仲間内のルール、いわば“オキテ”のダブルスタンダードの中で息苦しさを感じながら生活している。

例えばいじめを先生に告げることは、社会のルールでは正義の行為であるが、子どもたちのオキテの世界では“最悪”の行為となり、そのことがわかれば厳しい制裁がまっけて、たちどころにいじめの対象になる。子どもはそれが恐くて先生には告げられない。

子どもは自分の所属している集団の“オキテ”は何があろうと守らなければならない、ほとんどの場合は社会の善悪の判断や道徳律に優先する。

問題をもつ子どもの多くいる集団は、いわば正義や社会のルールが通る公正な集団というよりも、その集団だけに通用している“オキテ”が完全な優位を保ち、それが集団を支配している状態なのである。まずそのことを理解した上で、個々の子どもの指導にあたる必要がある。

⑤ 彼らはわがままかもしれないが、本音は「みんなの仲間に入りたい」

彼らのストレスの大きなものとして、当然「勉強がわからない」ということはある。他方、自分はみんなから学級の一員として認められていない、期待をされていない、授業では自分の出る幕がないという気持ちをもっている。

学び合い、とりわけ小集団学習の場面などで、少しでも自分の意見を言ったりし学級の誰とでも自然な交流ができるようにさせることは、改善に向けての重要な戦略である。もしも非協力的なときには、むしろ友だちは積極的に注意をし、仲間に入れてほしい。

また学級の活動や行事などでは、必ず役割を分担し、応分の責任をもたせたい。それを一人より、むしろ学級の誰かのサポートで役割を成し遂げることが大きな意味をもつ。

⑥ 少しでも将来への展望がもてるように

問題をもつ子どもたちは、一般に夢や希望はあっても現実とのギャップに悩み、自分の将来への展望がもてずに八方ふさがりの状況がある。それが日々の生活で感じているストレスをさらに増大させている。また地道な努力を嫌がる傾向にあるため、学力がついていかず、そのことが彼の将来への当面の選択肢を少なくしている現状があり、追い詰められた精神状態であることは容易に想像できる。

何とか自分の将来に望みがもてるような、明るい先の見通しをぜひもたせたい。そのためには、ていねいで親身な相談とともに、その子の立場に立った教師の情報収集や先例に学ぶことも大事である。

また中学生であれば、いろいろな社会体験、職場体験など本人の経験を広げる努力もしていきたい。そのことは、立ち直りのための大きな力になる。

また段階的に少しの努力で達成できそうな当面の目標、とりわけ自分がかんばることで報われる学習の目標をもたせていきたい。(相手がいる対人関係の改善などは、必ずしも自分の思うとおりにならないこともある)そしてその目標達成を「見守り応援してくれている人」がいるということも理解させたい。それは、何よりの励みと安心感につながる。

(4) 反省するとはどういうことか

① 反省することの中身は何なのか

俗に言う賢い子どもほど、何か悪いことをして注意されたり説諭を受けると、謝り方を心得ていて、決して言い訳や反発などせず、うまく謝る。また指導する方も、謝罪の他に更に今後の決意などを述べられると指導がうまくいったと思ひ、ついその気になる。

しかし、それにごまかされてはならない。もしかすると、その態度は「早く注意を終わらせてもらうための処世術」であるかもしれない。特に教師は、「これから頑張ります」の言葉にはとても弱い。では、どう指導していけばよいのだろうか。

まず、子どもが本当に「反省する」とは、どういうことなのかを明らかにしなければならない。それは、自分のやったことに徹底的に向き合わせることである。

「自分の中にある何が、どんな心がそういう行為をさせたのか」、「その行為が、どうしていけないのか」、「誰に迷惑をかけたのか」、「なぜそれを自分が防げなかったのか」、そのことをしっかりと吐露させなければ、また同じことが繰り返し起きる。必要によっては、気持ちを書かせることも大事である。

それが正直に出てくれば、今後に向けての決意表明などは無用である。決意は、自分を正直に振り返ることができれば自然にわいてくる。指導するには、子どもと真剣に向き合う、指導する側の根気こそが重要なのである。

② 安易な謝罪は「百害あって一利無し」

自分のよくない行為で他人を傷つけたり、迷惑をかけたり、社会では認められない行為をした場合には、当然、しかるべき謝罪は必要である。生徒指導では、その謝罪をいつどのように行うかが、彼を立ち直らせるためのキーポイントになる。

しかし往々にして加害者の親は、面倒なことは早く済ませたい、親自身も早く楽になりたいという気持ちから謝罪を急ぐ傾向にある(状況によっては一刻も早い謝罪が必要な時

もあるが)。また時には、勝手な言い分で謝罪をしないという親もある。子どもも、謝罪さえすれば、何の反省がなくとも、そのことは終わったという気持ちになる。心のこもっていない謝罪ほど、被害者やその保護者を傷つけることはない。

よく小学校で行われている加害者、被害者の双方を同席させ「儀礼的に加害者が謝り、被害者はそれを了承し、これからは仲良くしようと表面上の手打ちをすること」は、必ず禍根を残す。被害者は本当には納得せず、加害者はこれで終わったと軽く考えてしまう。

加害者には、そうした行為をしてしまった自分の心と真剣に向き合わせ、本当に悪かった、どうしても被害者に謝りたいという気持ちになった後に、謝罪に向かわせることが個別の生徒指導ではもっとも重要な指導のポイントとなる。

それには、作文などを通じた根気強い交流指導や面談などが必要になってくる。そこでは、教師が一方的に教えたり諭したりするのではなく、子ども自身が考え、気づくことを何より大事にしたい。双方の保護者にもそのことを十分に理解させたい。

5 学級集団の一員となるために

学級に問題をもつ子がいるときには、どうしても立ち直らせてやりたい。それは当該の子どものためはもちろん、学級集団の成長にとっても必要なことである。それには彼が学級の本物の仲間となる必要がある。それで、個の問題も集団の問題も解決に向かう。

(1) 立ち直りには、仲間からの「一緒にやろう」のメッセージが何より有効

学級では、子ども同士が力を合わせ課題の解決に向かう活動が、仲間づくり・人間関係づくりには最も効果的である。それは「とってつけたようなエクササイズ」ではなく、特別活動における集団活動としての、いわば生産的、創造的、奉仕的な活動、あるいは授業での課題解決に向かう本物の協同活動である。

その中で集団目標に向かい自分の役割を果たしながら助け合ったり、力を合わせることで、メンバー同士が仲良くなり人間関係ができていく。

とりわけ、互いに感謝したり仕事ぶりを讃えたり、良さを認め合うことが人間関係づくりには最も有効である。問題をもつ彼らも何としてもその輪の中に入れてほしい。その輪の中に少しずつでも入っていくプロセスが、彼の立ち直り、改善のプロセスなのである。

ある時、教師の言うことには反発ばかりしている男子が、小集団学習の時に、同じ班の女子の注意を素直に受け入れ、学習に参加し自分の役割を果たしていたことがあった。

それは、ふだん教師から受けている「暗黙の、集団からの排除や他への迷惑を伝えられる注意」ではなく、「君も仲間に入ってほしい、一緒にやろうよ」というメッセージを彼女から受け取ったからである。

(2) 問題をもつ子どもを仲間に入れるために教師のやるべきことは

子どもの中には、昼休みなどは図書館で一人静かに本を読むことを好む子どもがいる。もちろんその個性は尊重してやらなければならない。

しかし、仲間やグループに入りたくとも自分からは入っていけない子や、問題をもって仲間で仲間から“はじかれ”孤立してしまっている子どもがいることがある。

そういう子どもは、自由な時間は一人でいることになり、授業中の小集団学習はもちろ

ん、少しでも友だち同士の交流のある学習活動を嫌がり、教師中心の一斉指導を好む。

ここまでくると、なかなか自分の力で仲間に入ることが難しい。彼らが一番困難だと思っていることは、「共通の話題選び」である。そこにとっても神経を使い、「もし話題が合わなかったら」、「無視されたら」との不安から、結局は一人でいることになる。

また、問題をもつ子は、自分は仲間から受け入れてもらえていないということを暗黙のうちに察知しており、その反動で一人で強がった態度をとっていることがよくある。

当然ながら教師は何らかの支援策を講ずることになる。明確な“いじめ”であれば別であるが、そうでなければ、教師の安易な直接介入はむしろ事態を悪化させ、孤立している子に、よりみじめな思いをさせかねない。

教師のやるべき支援は、子どもが共通の話題づくりに苦勞しなくともよい授業や特別活動の場面で、課題解決に向けての小集団におけるコミュニケーションを活発化するよう徹底していくことである。

そうしていくうちに、だんだんと友だちとの交流への抵抗感が薄れ、誰とでも普通に話ができるようになっていくはずである。荒れている子にも大きな効果がある。

他に心構えとして指導したいことは、子どもたちは対立している友だちに対しては、相手側の非のみを強調しがちになるので、子どもたち双方のいわば、「歩み寄り」を促すことである。「歩み寄り」とは、「相手の言い分とこちらの言い分を足して2で割るところに落ち着かせること」であると考えている。その思考や判断がうまくできるようになると、人間関係もスムーズにいくようになる。

(3) 学級の一員としての仕事はどんなことをしてもやらせたい

問題をもつ子は、学級や集団の一員としての仕事や自分の責任を果たさないことが多い。わがままな心やなまけ心、上からの指示に対する反発心、格好をつけたい習性などが要因となっている。授業中の迷惑や乱暴な振る舞いととも、この自分勝手さ、無責任さが周りの子どもが、本音では彼らを排除し、仲間として認めない大きな理由である。

そこで日直や清掃等、学級の一員として誰もが必ずやらなければならない仕事から始めて、それを教師と一緒に助けながら必ず果たさせるようにしたい。

しかし、このことは簡単なようで、彼は仲間内の見栄もありとても難しい。根気が何より必要になる。またその指導は、彼との接触や交流のチャンスであると同時に、彼には学級のメンバーからの信頼回復の最低条件であることを伝え続け、心して指導にあたりたい。

そして、今の彼がやるやらないに関わらず、学級や班での係や役割の分担は必ずやり、彼には伝えておく。少しはやる気がでてきた時の準備と態勢は常に整えておきたい。

「どうせやらないんだから」、「反省させるため」ということで彼を役割分担から外したのでは、彼はその集団からの排除の姿勢をひしひしと感じ、彼を立ち直らせる芽を完全に摘んでしまうことになる。

(4) 他人の話を「聞くこと」がもっとも重要

とかく問題をもつ子は、他人の話を聞くことが苦手である。それは、単なるスキルの問題ではなく、そこには他人から強制されたくない、自分にとって都合の悪いことは聞きたくないという心理も強く働いている。「心が耳を閉ざす」のである。

しかしたとえそうであっても、まず先生や友だちの話や意見を「よく聞くこと」を強調したい。他人の話を聞けば自分の話も聞いてもらえること、自分の言いたいことを言えるよりも、他人の話をちゃんと聞ける人になることの方が大事だということを理解させたい。もちろんそのためには、教師が彼の話が彼が納得するまで聞くことが前提になる。

そのことができるようになれば、心の持ち方も少しずつ変わり、他からの意見も次第に受け入れるようになっていくはずである。そうなれば、本物の学級の一員になっていく。

(5) 友だちづくりへのアドバイスのポイント

友だちがなかなかできない子どもや友だちとのトラブルが多い子どもには、教師の直接的なアドバイスが必要になる。そのポイントをあげてみたい。

- ・他人の悪口は絶対に言わないことを心から誓わせ守らせる。悪口が、仲間に入れてもらえない、学級での人間関係づくりがうまくいかない最大の理由になる。このことは学級のルールではなく、“人生のルール”として身に付けさせたい。
- ・親友のつくり方は昔から変わらない。その人のためなら、自分が損をしても構わない、つらい立場になることをいとわない、損得を抜きにして相手のためにつくそうとすれば、そして、その喜怒哀楽を分かち合おうとするならば、必ず親友になれる。
- ・相手と何かトラブルがあった場合には、すべてを相手のせいにしたりせず、“知恵ある妥協”に心がける。“互いの要求を足して2で割る心構え”がなければ集団生活はうまくいかないことを教える。
- ・自分はそのままで何も変わらず、つい相手を変えようとするが、それはとても難しいことで、まず自分が変わることの方が先だということを理解させていく。また、相手が自分より上に行ったと思った時には、相手を引きずり下ろすのではなく、自分が昇る努力をすることで、相手の尊敬も受ける。
- ・自分のありのままを素直に認める努力をさせる。見栄を張っていたり、プライドがじゃまをしているようでは自分自身が一番不安定になる。人と比べて劣っていることがあったにしても、それは恥ずかしいことではないと教えていく。しかし、自分のよいところは積極的に認知させ、自信をもたせる。
- ・次には、みんなの役に立つことで自分のできることを地道にやっていくことを勧める。しかし、決して自分からアピールをするようなことはしない。

(6) 周囲の子どもには、「心の痛み」を醸成し、共に成長させたい

問題をもつ子についての解決を子どもたちだけに頼ってはいけませんが、仲間のために自分のできることは何かを考え行動に移すことは、集団づくりには欠かせない。

仲間の問題行動を点検し追求するだけでは、自分は常に傍観者の立場にあり、自分は安全で何も心が痛まない。せめて、「こうなる前に自分は何かできなかったのか」、「自分にはこれまで何が足りなかったのか」という気持ちが少しでもなければ、相手の行動や考え方を変える本物の力にはなっていない。

他人への助言も、相手の心の痛みを共感的に理解し、自分の心の痛みとともに相手の側に立って行わせたい。つまり“その子になって”問題を考えさせるのである。

そのことは自分の心の成長にも役立ち、相手も「みんなのおかげで」という気持ちをもつことにつながるのである。

しかし、一人一人がそのレベルまで考えられない状態のまま、問題の解決のための学級会などを開いた時には、「つるし上げ」、「責任のなすり合い」、「互いの不信感」しか残らないので十分な注意が必要である。

6 ふだんから教師に心がけておいてほしいこと

(1) 中学1年生でも3年生の最高のツッパリ生徒だと思って注意をする

中学生は確かに未熟で、教えなければならないこともたくさんある。しかし、それと、生徒を人格的に見下すこととは全く別である。教師に対する反発の根源の一つはここにある。生徒の「先生に馬鹿にされた」、「理不尽な指導をされた」、「自分の言い分を聞いてもらえなかった」という思いは、生涯消えることはない。これは小学生でも同じである。

子どもが反抗しないから、口答えをしないからといって一方的に叱りつけたのでは、恨みだけが残る。どんな子でも、注意や叱責をする時には、集団の中一番面倒で気を遣わなければならない子どもをスタンダードにしたい。それでちょうどよいのである。

中学校では、1年生の時に安易にそのような指導や体罰を受けたがために、3年生になった途端、その教師に反発し、反抗してきたという例はいくらでもある。そんなことを考えると、1年生の時ほど、ていねいな指導に心がけなければならない。どんな子どもに対しても、注意をするときには学校で1番の反抗的な生徒だと思って、その子の気持ちを考えながら、慎重な配慮のもとで指導を行うことが必要である。

例えば遅刻をした時には、いきなり「馬鹿」だのと怒鳴るのは愚の骨頂である。「どうして遅刻をしたの」と理由を聞くところから入るのも今一步である。「遅れたけど家で何かあったのかな」と訊ねてみたい。どんな言い方であろうが、遅刻をしてはいけないというメッセージは伝わる。どれが子どもの心に響くかの問題である。

(2) 教務室の雰囲気子どもを育てる、そこでは子どもを叱ってはならない

子どもを「大勢の教師の目」のある教務室で叱ってはならない。子どもは、何かを叱られたことよりも、大勢の教師に取り返しのつかない“悪い子”のレッテルを貼られたと思い、傷つく。「大勢の教師の目」は、褒めるためにこそ使うのであり、叱る時には絶対に使ってはならない。その教師の行為はある意味「卑怯」というものである。

また、用があつて教務室に来た子どもにも、いろいろな教師がさりげなく声を掛けてやりたい。自分はこんなにも関心をもたれているという安心感は、大きな自信にもつながっていく。

さらに教務室は、教師や目上の人との対応やコミュニケーションのし方を実際に学ぶ場でもある。短時間でも丁寧に接してやりたい。子どもは学校の中で、そこでしか学べないこともある。教務室の雰囲気子どもが育つという側面は大いにあり、それはまた、学校の雰囲気づくりにも大きな影響を与える。

(3) 本人がピンチの時に責めてはならない

本人がピンチの時、例えば仲間はずれになってしまった時に、「君にも原因があり、こういう所を直さなければならない」などと、ここぞとばかりに注意をする教師がいる。

こんな指導は絶対にやってはならない。本人は弱っているし、当面のピンチを何とかしのぎたいと思っているので、それを聞く準備は全くできていない。言われたところで、残るのはピンチの時に助けてもらえなかったという恨みだけである。

また、今の子どもたちはおしなべて耐性が弱くなっている所以、その指導は、もしかすると不登校などを誘発する危険すらはらんでいる。この時こそ、その子どもとの信頼関係づくりのチャンスと心得、最優先でその解決にあたりたい。この“最優先”ということが何よりの誠意として相手に伝わっていくのである。

そして、必要があるのであれば、まず本人を元気にしてからそれらの問題を一緒に考えていけばよいのである。保護者に対しても全く同じである。

(4) 教師による教育相談は、相談後の「今はどうだ」の一言こそが大事

子どもには「困ったことがあったら何時でも相談しなさい」と言うが、相談が「ああしなさい」、「こうすべきだ」という押しつけになってはいないだろうか。

相談は、まず心から子どもの話に耳を傾け、相手が本当に望むこと、やりたいと思っていることを引き出すことに徹するべきである。その上で、本人の希望があれば今後の行動のあり方などを一緒に考えたり、支援をしていけばよい。

そして、教育相談をより意味あるものにするには、その後の「今はどうだ」、「がんばっているね」、「よくなっているよ」等は、「相談を真剣に受け止めた」、「君のことは忘れてないよ」、という確実なメッセージとなり、子どもの心を安定させ、また何かあれば相談しようという気にさせる。

この種のフォローができることが専門のカウセラーとは違う、学校においていつも一緒に生活している教師による教育相談の一番の利点ではないかと思っている。

(5) ある時は「教師と子どもは一心同体」、それがすごい教育力になる

教育は、教える者と教えられる者の間で成立していく。しかし外から見た時に、授業などでいかにも「教師が教えてやっている」という、そんな様子が見えている時には、果たして教育が成立しているのかと疑問に思うことがある。

それよりも授業では、教師と子どもが「一心同体」となり夢中になって課題を追求している姿、行事では、子どもと肩を組み一緒になって額に汗しているところに本当の教育があるのではと思うことがある。

そこには、子どもが知識や活動の仕方を身に付けていると同時に、教師を通して人としてのあり方を学んでいっている姿があるからである。

ところで、私の校長時代にこんなことがあった。3年生の男子が、校外の公共施設でふざけ合いから、ケンカになり互いに暴力を振るう事件が起きた。二人の担任は共に家庭訪問をし、本人にも指導した。校長としても看過できないので、各担任に、本人たちに反省文をもたせて校長室に来るよう伝えた。

二日後に二人が校長室に来た。私は呼んだ覚えはなかったが担任も一緒だった。生徒は

何より心強かったと思う。反省文もとてもしっかりしたものだ。聞けば担任が何回も指導したという。校長室では、担任も生徒いやそれ以上の反省深い態度、自分がケンカをしてしまったかのような態度で私の話を聞いていた。

生徒にとっては、無言ではあったが私の話の何倍もの、教育力になったはずである。学級担任はこうでなければならないと思った。

IV 保護者との連携をどう図るか

1 保護者との連携のための基本的な心構え

(1) 保護者は尊重すべき生徒指導の最大のパートナー

子どもは、学校では教育すべき大切な児童生徒ではあるが、親にとっては正真正銘のかけがえのない“我が子”である。その厳然たる事実は絶対に忘れてはならない、いわば生徒指導の“原点”である。

したがって、教師にとって保護者は上から「ものを申す相手」ではなく「力を合わせるパートナー」なのである。問題をもつ子の親に対しては、「大変なその子を現に今育てている」という共感から入りたい。

心を閉ざしたり、指導のあり方をめぐって対立している保護者にも、たとえすぐには分かってもらなくとも、学校として、担任としての取り組みを理解してもらえる日が来ることを信じ、子どものために誠意を尽くすしか方法はない。

例えば、保護者と言い争うなどは言語道断であるが、仮に、教師の正論で保護者をその場で屈服させることができても、その時相手に残るのは憎しみと怨念だけである。あくまでも理解し納得してもらうことが必要である。

しかし時には親自身に問題があることもあり、それは大変に難しいことは承知しているが、たとえそうであっても、子どものために教師には、「あきらめる」、「開き直る」という選択肢は用意されていない。自らを変えようと保護者自身が気付いてくれるまで、粘り強く話し合いを続けていきたい。そうなったときに、子どもが確実に変わっていく。

ところで不登校の子、いじめに関わる子、問題をもつ子、どんな子にとっても現状の問題解決にあたって一番切ないのは、親と教師や学校が対立することである。まず双方が仲良くすることが何よりの願いなのである。

時に、親子で学校に「抗議してきている」ことがあるが、その時こそ、学校や教師には冷静な対応が求められる。生徒指導はどんな方法であれ、子どもを望ましい方向に導かなければならない。いわば結果が勝負であり、言い訳のきかない厳しい営みである。いったん保護者と決裂すれば、結果を出すまでには気の遠くなる時間と労力が必要になる。

(2) その子のために、教師の“良心をかけて”保護者に向かいたい

通常、教師が指導に困難をきたしている子どもは、同じようにその保護者とも協力関係を結ぶことが難しいケースが多い。だからと言ってそのような保護者を避けたり、子どもの問題行動を見て見ぬふりをしてよいことにはならない。そうやっても誰も問題を解決してくれず、かえって事態は悪化していくだけである。

当然のことではあるが、子どもの問題を保護者だけにその責任を押しつけることはできない。子どもは家庭だけでなく学校でも生活している以上、学校や教師にも応分の責任は必ずある。まずこのことの自覚から出発しなければ問題解決の糸口は見えてこない。

教師は、問題行動を示すどんな子や保護者に対しても、「集団からの逸脱行動を正す」という集団規律優先の考え方をまず脇に置き、「この子はこのままでよいわけではない」、「この子が豊かな社会生活を送るために」、「この子が将来不幸にならないために」といった、「この子のために」という“教師の良心”をかけて全力で指導にあたりたい。

そしてその子の実態や将来に向けての方向を保護者と共有し、互いに何をすればよいかの知恵を出し合うことができれば、解決や改善の糸口が自ずと見えてくる。結果としてそのアプローチは、その子の集団適応にも早く功を奏していく。

間違っても、「他の子の迷惑になっているから」という理由を強調したり、「きまりが守れない悪い子」というレッテルを貼ったり、ましてや「教師自身が気に入らない子どもである」などという気持ちは微塵ももってはならない。そういう教師の感情は保護者や子どもに簡単に見透かされ、教師への不信感を募らせるだけになる。

(3) 保護者対応のスタンダード

学校や学級の中で一番気を遣わなければならない保護者や、丁寧に対応する必要のある保護者への対応を学校や学級のスタンダードとしたい。善意の保護者に甘えたり、このぐらいでいだろうという安易な対応に終始したりすると、いつかは必ずしっぺ返しがかかる。

そして担任は、自分の判断で保護者連絡をした時には、学年主任にはそのことを必ず伝え、主任はどんな事態にも対応できるようにしておきたい。仮に、保護者からいきなり校長に電話があった時に、もしも校長がその事実を知らなかった時には、保護者の怒りは倍になる「我が子のこんな重大なことを何故校長は知らないのか、学校は何をしているのだ」となる。どんな親でも、自分の子どもの危機を感じた時には、黙ってはいない。

また、小学校からの問題の子の親は、学校は常に何かを注意するところ、叱られるところという認識をもっていて、学校には不信感をもち、避けている場合が多い。学校には来ないばかりか家庭訪問をしても会ってもらえない親もいる。

粘り強く働きかけを続けることで、「学校は叱る所ではない、子育ての悩みを共有してこの子のために一緒に力を合わせましょう」という意識と教師への信頼感をなんとかして回復させたい。そうでなければ、子どもは何も変わっていかない。

2 保護者との連携とは、何をどのように連携すればよいのか

(1) スムーズな連携のための基本

生徒指導のパートナーである保護者とは、日ごろから連絡を密にし、互いの考えや方針、取組みを理解し合っていなければ、子どもはうまく育たない。学校と家庭で言うことが違っているのでは、子どもは板挟みとなり苦しむだけである。

しかしいまだに、教師が保護者と連絡をとることや学校に来てもらうことを、子どもへの一種のペナルティと考え、子どもや保護者への脅しの材料に使ったり、それを子どもとの取引に使っているような恥ずべき教師の実態もある。まずは、「保護者を呼びだす」や

「招喚」などという言葉が学校から一掃しなければならない。

また、学校からの連絡や教師と話し合いをもつことを、恐れったり、嫌ったり、「恥だ」と考えている保護者も多くいる。これでは到底パートナーシップは築けない。

学校で何か子どもの生徒指導上の問題やトラブルがあった時には、当然保護者にもそのことを連絡し、問題への対応や今後の指導について理解を得なければならない。学校としての十分な説明が必要である。

そのポイントは、まずは教師の所見を交えずに、「事実を正確に伝えること」である。保護者は、学校で何があったのかを詳しく知りたいのである。そこから出発したい。その上で、「トラブルの解決が子どもの成長となるような解決の仕方」を、双方で知恵を出し合い、方針を共通理解し、双方がやるべきことを実践していけばよいのである。

(2) 保護者との共通理解は思いの外難しい

単発的な問題行動と違い問題行動が習慣化されてきている子どもに対する改善への指導は難しく、即効薬はない。とりわけネックになっているのは、学校と保護者の「子どもの現状に対する共通認識」である。

具体的な事実や行動など、現象面の理解(目に見えることは共通理解できる)に止まらず、問題解決のためには、その背景や原因となっていることを共通認識しなければ、両者が解決の土俵には上れない。

そこが問題解決の核心であるのに、大抵は、その点で食い違いがおき、双方ともなるべく相手側や自分以外に責任を転嫁しようとする。それではいつまでも連携ができない。

それぞれが、応分の責任や心の痛みを本音で感じながら、その子の「見えない部分を、客観的な事実に基づき冷静に見ようと努力をすること」によって、共通認識に至るのである。学校と保護者がそこさえ一致できれば、その後の改善のための手だてなどは、自然とはっきり見えてくる。

ところで、不登校など同じ悩みをもつ保護者同士や問題を起こした子どもの親同士が話し合い、連携する機会を設けることも時には有効である。とりわけ、学校外で、問題となる行動を共にしている子どもの保護者同士の連携や共通理解はどうしても必要である。

しかしそのためには、教師の周到な準備と保護者の話し合う目的の理解、実際の話し合いでは、批判のし合いではなく全員が同じ立場で話し合い合意を図ろうという意識がなければ、むしろリスクが大きくなるので注意が必要である。

(3) 「他の子が迷惑している」、「学校では困っている」は絶対に口に出してはならない

学校は集団生活を行い、また教師はその子一人だけを担任している訳ではないので、勝手な行動で集団に迷惑をかけたり、手に負えない子がいる時には、保護者には上のような言葉を言いたくなる気持ちはわかる。

しかしだからといって、それを言った時には、結果として保護者との信頼関係はそこで切れ、関係修復は極めて困難になってしまう。

保護者はそんなことは“百も承知”であり、保護者が自ら言うのはともかく、あくまでも教師の方からは言うてはならない「禁句」であり、問題解決には何の足しにもならない。

そういう類のことを言われた保護者は、「やっぱり自分の子は学校では邪魔者なのか」、

「集団からは排斥され、教師からは見捨てられた」と思うのである。中学生の保護者ともなれば、小学校時代の切ない経験から、自分の子の望ましくない状況は十分に承知しながら、有効な方策や手だてがないまま現在に至っているのである。

その子については保護者も困り悩んでいる。そんな時、追い打ちをかけるように、教師からその言葉が発せられ、それが子どもに伝わった時には、保護者との関係はもとより教師とその子の関係も断絶してしまう。それを言ったばかりに、問題解決が困難になり、苦労が倍になった例はいくらでもある。

まず教師は、「子どもは迷惑や心配をかけるもの」、「教師の思い通りにはいかないもの」、「問題があって当たり前」という心構えをもち、寛容の心をもって接していきたい。

言い古されている言葉ではあるが、その子を“丸ごと受入れること”から始め、直してやろうということではなく、“一緒にやっ払いこう”という態度が大事である。時間はかかるが、「その苦労があるから給料がもらえる」というくらいの気持ちでいきたい。

(4) 問題を大きくしてしまうのは、保護者を「情報飢餓状態」におくことである

子どものことで学校で何かあった時には、マイナス情報でもかまわないが、保護者に事実を正確に伝え問題を共有したい。保護者は何も情報がないことほど不安なことはない。

例えば、学校で誰かに靴を隠された事故があったとする。被害者の子どもや親は、誰がやったかがわかり、そしてその本人からの謝罪がなければ、到底納得しないし、それが叶うまでは、その要求がずっと変わることはない。この種の問題は時間が解決してくれることはなく、むしろ時間が経てば経つほど不安や怒りの感情が大きくなっていく。

学校としては、事故がわかった時には通常、全員で靴を探すとか、目撃者がいなかったかと情報を集めたり、やった者は申し出るように働きかけたりする。さらに、全校や学年の集会で心に訴えるような講話をする。

しかし、この類の問題の解決は容易ではなく、誰がやったかわかることは稀である。解決に向けての取り組みや、事態に何も進展がなければ、被害者は“加害者の予想がついている”だけに、その悔しい気持ちはどんどん募っていく。

そんな中、少しでも被害者の気持ちを和らげるのは、家庭への解決に向けての取り組みの途中経過の連絡である。「今日はこんなことをやりました」、「残念ながら進展はありませんでした」、「今日の子どものさんの様子はこうでした」。期待に応えられていないという内容でも、時にはマイナス情報でも必ず伝えていきたい。

保護者は学校から何も情報がない、連絡がないことほど不安で不満なことはない。関心を持ち続けていてほしいのである。

毎日のように心のこもった連絡をすることで、中には「もうわかりました、連絡はいいです、ありがとうございます」と言ってくれる保護者もある。

「学校としてやれることを全部やってくれた」、「学校もこのことは解決まで忘れることはない」、「継続して子ども(自分)を観ていてくれる」と保護者と子どもが思った時に、ようやく事態は少しは収束の方向に向かう。親や子どもにそのことの納得がいかない時には、危機的状況はいつまでも続いていく。

しかし中には、何もその後の連絡をせず、我慢しきれなくなった保護者の問い合わせに対し、「誰がやったかわかったら連絡しようと思っていました」などと、言い訳をする教

師がいる。子どもや保護者の気持ちが何もわかっていない。そんなことでは、信頼関係は築けず、危機が拡大していくばかりである。

ところで話は変わるが、例えば、ケガや病気で子どもが早退した時などは、翌日の朝の「今朝の様子はいかがですか」という一本の伺いの電話こそ、保護者との信頼関係づくりの鍵を握る。保護者は、先生が自分の子を忘れていない、心配をしてくれていたということに信頼を寄せてくれるのである。そんな細やかで温かな教師の心遣いが、どれだけ信頼関係を深めるかわからない。

3 保護者との面談にあたって

(1) こちらが聞きたいことではなく、保護者の言いたいことに耳を傾ける

保護者との個別面談にはいろいろなケースがある。代表的なものは、定例の保護者懇談会と何かあった時に教師の方から求める面談や保護者の方から求めてくる臨時の面談(クレームの場合もある)である。

いずれの面談でも大事なことは、「こちらが言いたいことを言ったり、聞きたいことを聞いて終わるのではなく、保護者の言いたいことに耳を傾けること」である。そうでなければ保護者との信頼関係は築けない。

特に問題をもつ子の保護者との個別の面談は、子どもに関して保護者が抱えている悩みや問題を把握し、立ち直りに向けての共通理解を得るにはなくてはならないものである。

その過程では、「保護者の切ない気持ち」、「学校や教師に対する不平や不満」、「学校にしてほしいこと」などを言ってもらい、その後で「今、子どもにとって必要なことは何か」、「学校ができること」「家庭では何をしていけばよいのか」を相互理解し、そして、子どもの良いところや進歩を認めながら、「学校と家庭が力を合わせて一緒にやりましょう」という気持ちを確認できれば、子どもも少しずつ変わっていくはずである。

ここまでいくには時間はかかるが、あせって教師の言いたいことや結論を一方向的に押しつけた時には、保護者には不満だけが残り、何の効果もあがらない。

ところで、専門のカウンセラーによる相談とは違う、担任による保護者面談(主として定例のもの)の最大の特徴は、保護者が面談を通して悩みを言う、相談をするというよりは、担任から自分の子どもを褒めてもらいたい、そして担任に対して要望を伝える機会であると思っていることである。

普通、保護者は、自分の子どもを褒めてもらいたくて担任教師との面談に足を運ぶと考えてよい。どんなことでもよいが、我が子を褒めてくれない担任とは信頼関係はできない。

教師は、抽象的で歯の浮くような褒め言葉ではなく、具体的な事実を必ず用意したい。それは、保護者とばかりか、子どもとの人間関係づくりにも抜群の効果を発揮する。

そして次には、「子どもをを取り巻く不本意な状況(学校が楽しくない、友だち関係の不調等)、我が子に対する不満(勉強しない、親の言うことをきかない等)を解決してくれるのは毎日一緒に生活し、指導している担任が一番であり、また担任にもその責任があるのではないか」との認識から、担任への要望を言うことが多くなる。時にはとても重い課題を突きつけられることも少なくない。

面倒なことであっても担任がそのことに真摯に対応しなければ、保護者は担任にはやがて話をしなくなり、信頼関係が築かれることはない。

(2) 保護者に他の子や他の親の話をする時には、当事者が同席していると思って

保護者面談の際には、他の子どもや保護者を引き合いに出したり、話題にすることは慎みたい。まして他所の子と比べて本人を褒めたり、他所の子に対し批判的なことを言うのは、聞いている保護者にはこれほど心地よいものはないが、それは、どんなに信頼できそうな保護者に対しても厳禁である。

他の子どもや他の保護者に関する情報や評論はプライバシーに配慮し、「当人たちが聞いても何の問題もない」というレベルで絶対に止めておかなければならない

良い話は必ずどこかで誰かが止めるが、悪口には尾ひれがついて、そのうちに本人やその保護者にも確実に伝わる。そうなった時には、当の教師ばかりか校長が謝罪したところで問題の收拾は極めて難しく、学校は大きなリスクをかかえることになる。

また子ども同士のトラブルに一方の保護者がクレームをつけてきた時には、教師がしゃべる「相手の子どもに関する話」は、相手の保護者や子どもに全部筒抜けであることはもちろん、自分たちにとって都合のよいことは、そこだけ抜き出され、相手への攻撃の切り札に使われることがある。面談の時には、相手の保護者も同席しているものと思い、聞かれても何の問題もない話をするのである。

どの保護者に対しても「ここだけの話」は絶対にあり得ない。「知っていても言わない良識」は、教師には特に必要である。それでこそ保護者の信頼を得ることができる。

(3) たとえクレームをつけにきた保護者も帰る時には笑顔で帰ってもらえるよう

学校を訪れた保護者には、どの職員も分け隔て無く明るく挨拶をし、温かく迎えたい。たとえクレームをつけに来た保護者でも、まずは話に耳を傾け、何が言いたいのかを把握し、少しでも合意できることを探していきたい。

そして家庭がやること、学校がやれることを期限を切って約束するなど、少しでも来てよかったという思いをもたせ、帰る際には何とか笑顔で帰ってもらう努力をしたい。決して決裂したり怒ったままでは帰さない。その時には、リスクはますます大きくなり、問題の解決は遠のくばかりである。

最低限、次の話し合いの約束ができるだけでもよい。間違っても保護者が二度とクレームをつけに来ないようにと学校に来たことを後悔させるような対応をとってはならない。

また、保護者が感情的になり、学校や担任に対し攻撃的になってくることもある。その時には、こちらも感情を使って対抗しようとする、泥沼にはまり事態が見えなくなる。

そんな時には、つとめて冷静になり、相手の感情には取り合わず、感情的になっている根の部分を理性的に理解しようとするすることで、だんだんと話し合いになってくる。

4 保護者と共通の認識をもちたいこと

(1) “たとえそうでなくとも”、親は子どもの「最後の砦」であってほしい

親が子どもに期待をすることは決して悪いことではない。子どもはその期待に応えよう、親に喜んでもらおうとがんばり、成長していく側面が大きい。

また、考え方によっては、その期待の質が子どもの性格をつくったり、人格形成に大きな影響を及ぼす。

例えて言うならば、子どもは親から、「テストで100点をとること」と「困っている

友だちを助ける」ことのどちらを強く期待されているか、日ごろの行動が全く違ってくる。

しかしながら、子どもがよい成績をとることを期待してはいけないと言っているのではない。親は、本当はそう思っているのに、口ではどうでもよいという言い方をする“二重のメッセージ”は、子どもの不信感を募らせるだけである。子どもに親の本音を伝えることは決して悪いことではない。

ところで、その時に忘れてはならないことが、「たとえそうでなくとも」という思いである。例えば勉強などは、がんばれば必ず100点をとれるというものでもない。そのときには、親の期待にはそえなくとも、「よくがんばった、一番悔しいのは君だ、安心してよい」という気持ちを伝えてやることである。

義務教育では、親がそれを大きく試されるのは、子どもが問題行動を起こしたり非行に走った時、それと高校選択の時である。「たとえ悪いことをしたにしても、君はお父さん、お母さんの子どもであることには変わりはない、その愛情は微塵も下がることはない」、「たとえ親の期待した高校ではでなくとも、君の決めた学校に誇りをもって進んでほしい」、と子どもに本音で言うことができるかどうかである。親が試される時である。

子どもの心が揺れ動いたり、不安定になっている時こそ、親が「最後の砦」となって子どもを守らなければならない。

(2) 親であれば子どもを信じたい、しかし子どもの何を信じてやればよいのか

子どもは、日々の生活、とりわけ友だちとのかかわりの中でいろいろな困難やトラブルに直面し、それを自分の力で乗り越えることによって成長していく。

中には、「いじめ」など、自分だけの力ではどうしても解決が難しいものもあり、その時には親や教師が助けていけばよいのである。

しかし、過保護と言われる親たちは、子どもに解決させるべき困難や問題までも親が代わって引き受けたり、解決してしまい、子どもの成長のチャンスを摘んでしまうのである。まさに“余計なこと”なのである。とりわけ友だち関係の問題(「いじめ」はもちろん別)などは、親がでてきた時には解決どころか悪化することは必定である。

またそのような親の特徴は、子どもが問題を起こした時に顕著に現れる。早く子どもを楽にしてやりたい、自分も楽になりたいという気持ちから、「子どもに代わって徹底的に謝るか」、もしも子どもが事実を認めなかったりごまかしている時には、「家の子に限って」とか「私は自分の子どもを信じます」などど、子どもを盲信し、やった事実まで帳消しにしようとする親がいる。これ以上子どもの立ち直りを妨げるものはない。

もちろん子育てにおいては、子どもを信ずることはとても大事である。しかし子どもの信じ方を間違ってはならない。なんでもかでも子どもの言う事を信ずるのではなく、大人の常識・良識をもって自分の子どもを観て、その善悪を正しく判断することはどうしても必要なことである。

子どもは嘘をつくときは目をそらし、ふだんとは様子が違うはずである。本当に愛情をもっている親ならば、そこは“お見通し”でなければならない。誰をごまかすことができても「親はごまかせない」という親子関係はとても大事である。間違っても、事実を消そうなどと思わないでほしい。

もしも子どもが間違っていたら、まずそれを全部引き受けた上で“その後の立ち直り”こそ誰よりも信じてやることが親としてのつとめである。

先のような問題のある親子は、たいていは成長に応じたいわば、「母子分離」ができておらず、特にそういう親は、子どもへの批判は自分への批判、子どもが褒められることは自分が褒められること、といった感情の同化がみられる。

そうした親には、子どもを「独立した人格をもった一人の人間として尊重する」、「決して子どもは親の付属品ではない」といった態度づくりに向かってもらうことが、子どもの健全な成長のためには何より必要である。

(3) 子どもの気持ちを汲むということ

家族で子どもと話し合う時間、それも話を一方的に聞き出すのではなく、子どもの話を聞く時間をできるだけ多くとってもらいたい。子どもは、親には話したくないことをたくさんもっている。それを聞きだそうとすると、子どもは黙ってしまう。そうではなく、子どもには思いをはき出させなければならない。それは、子どもの心を安定させると共に、家族の絆を再確認することになり、それで多少の困難にも耐えることができるようになる。

また、コミュニケーションは一方的ではなく接続してこそ意味がある。そのために大事なことは、相手の気持ちを汲むということである。

例えば中学生の場合、いつもは90点くらいとる生徒が60点のテストをもってきたら、どう言うのか、一番悔しいのは本人である。そんな時母親がショックを受けて「何よこの点数」では話にならない。あるいは、「残念だったね、次がんばろうね」も今一步で、子どもの気持ちを汲んだことにはならない。まず、第一声は「よく見せてくれたね、きっと見せたくなかったでしょうに」ということだろう。隠さないでもってきたという子どもの気持ちを汲み取り、次に「今度がんばろうね」と自分の気持ちを添えればよい。

相手よりも自分の気持ちが先に出てしまつては、子どもの気持ちを汲み取ったことにならない。こうしてコミュニケーションは接続していく。

(4) 大人が子どものモデルや目標になりたい

最近の社会における子どもの問題の原因の一つに、“大人が子どもの生き方のモデルになっていない”、“その子があこがれるスターはいても理想とすべき大人がいない”という現状をあげる人がいる。傾聴に値する。「すべての大人はすべての子どもの教師たれ」という厳しい言葉もある。

子どもは、自分の描く理想の大人を見つけ、「自分もあの人のようにになりたい」と思い、そうなるよう努力していくならば、決して間違つた方向にはいかないであろう。まずは、大人が子どもに目標とされるような大人にならなければならない。

そう考えると、子どもにとって一番身近で目標になりやすいのは親や教師である、子どもに恥じない生き方をしなければならない。

例えば、子どもには、大人も勉強することを親を通して教えたい。新聞記事に注目し、そこで学んだことを生活に取り入れていく勉強もある。自分の親であると同時に社会に生きる一人の尊敬できる大人としての親のそんな生活態度そのものがモデルとして子どもに理解され、時に目標にされていくのである。

おわりに

これまでずっと書いてみたいと思っていたレポートをようやく書き終えたというのが、今の正直な感想である。

扱ったのはいろいろな個性をもった子どもを直接相手にする生徒指導である。たくさんの方論があることは承知の上であり、他の視点や優れた手だてをもっておられる教師は大勢いるに違いないと思っている。

しかし、ここで言っておきたいことは、もちろん完全ではないし、十分な成果をあげたとは言い難いが、私は、自分がこれまで学んできた高旗正人氏の「自主協同学習」を拠り所として生徒指導や学校経営をやってきたということである。

「自主協同学習」は授業づくりのためだけの理論ではなく、広く教育全般を支える「教育理論」であることを身をもって実感している。

ところでそんな中でも“生徒指導は生き物である”という思いは年々強くなってきている。したがって生徒指導が特定の方法でうまくいくとは全く考えていない。

生徒指導には教科書や教材はない。正に「人間と人間の営み」であり、互いの人間性がストレートにぶつかり合う。

それだけに人真似ではなく、自分の個性に合ったもの、自分らしいやり方を追求していくものでなければならないと思っている。

しかし、それはまったくの経験論や無手勝流でよいということではない。子どもの健全な育成や成長に関わる理論のうち、自分が一番納得するものの基盤にたったものでなければならない。

そうでなければ、いくら子どものために「よかれ」と思って努力をしても、それが徒労に終わってしまうこともある。成果をあげるためには、自分の実践を確かに裏付けてくれる理論や考え方が必要なのである。

本レポートが少しでも実践の参考になれば幸いである。また、忌憚のないご批判を聞かせていただければありがたい。

平成26年9月

関根 廣志

※ 主な参考文献

- | | | | |
|--------|------------------|------|--------|
| ・高旗 正人 | 「子どもと学校の理論」 | 2007 | ふくろう出版 |
| ・高旗 正人 | 「自主協同学習論」 | 1985 | 明治図書 |
| ・河合 隼雄 | 「子どもと学校」 | 1992 | 岩波新書 |
| ・梶田 叡一 | 「<自己>を育てる」 | 1996 | 金子書房 |
| ・坂本 昇一 | 「<子どもの心>を癒し育てる」 | 1998 | 小学館 |
| ・今井 盛章 | 「いい人間関係の心理学」 | 1995 | 三笠書房 |
| ・永崎 一則 | 「人間関係の築きかた」 | 1989 | 三笠書房 |
| ・平井 信義 | 「思いやりのある子の育て方」 | 1993 | PHP文庫 |
| ・碓井真史 | 「誰でもいいから殺したかった！」 | 2008 | ベスト新書 |